



Title	3. ニュージーランド・マオリ編
Relation	コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究 ～観光とコミュニティの幸せな関係性の構築に向けて～ = Case Studies of Community-Based Tourism : Towards a Sustainable Happy Relationship between Tourism and Community
Citation	CATS 叢書, 3, 107-166
Issue Date	2010-02-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42685
Rights	© 2010 北海道大学観光学高等研究センター、財団法人日本交通公社
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATSLibrary03_107-166.pdf



3. ニュージーランド・マオリ編

(1) ニュージーランド調査研究対象地の概要

1) ニュージーランドの調査訪問地



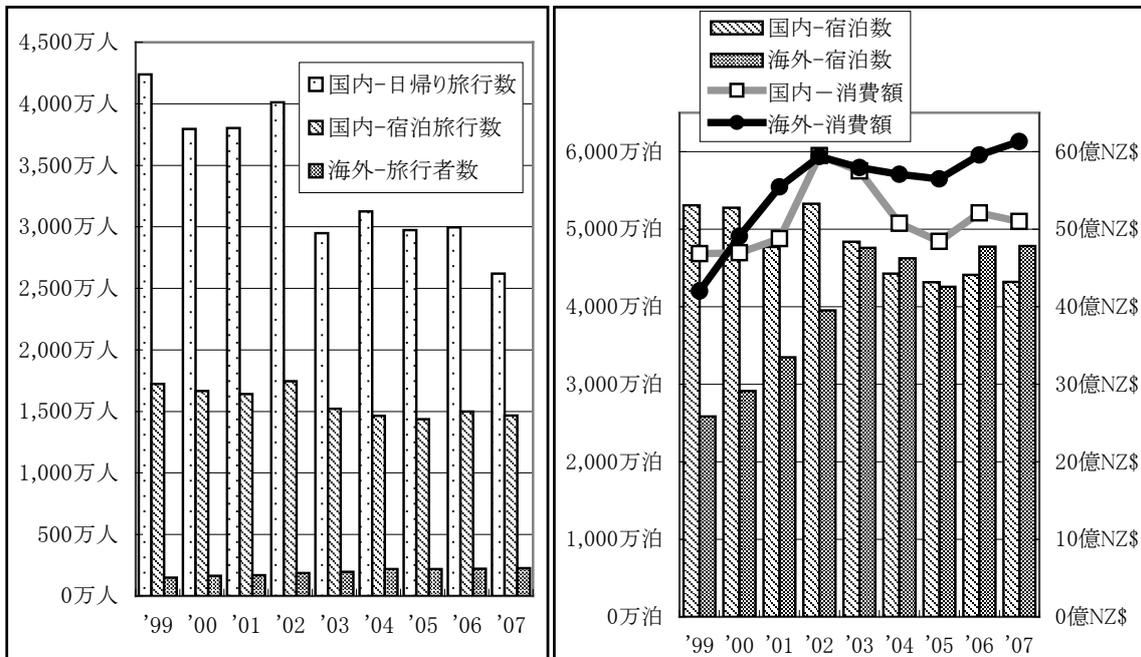
2) ニュージーランドの概要

項目	内容	備考
国名	ニュージーランド	
政体	立憲君主制	
元首	ニュージーランド国王 (政府の助言に基づき国王により任命されたニュージーランド総督が国王の職務を代行)	ニュージーランド国王とイギリス国王は同一人物だが、王位は独立して存在する。
首都	ウェリントン	
面積	268,680 平方 km ²	ほぼ本州+九州の面積
標高	海拔 0m~3,754m	最高峰は南島のクック山
地勢	北島と南島の大きな2つの島と、多くの小さな島々で構成される。北島には、険しい山脈はないが、火山活動が活発である。南島の中央には南アルプス山脈がそびえ、3,000m以上の峯が18ある。両島とも温泉地が各地に点在する。	
森林比率	31.0%	世界森林資源調査 2005 (FAO)
気候	ほぼ全土が西岸海洋性気候に含まれ、夏は涼しく、冬も極端な寒さではなく、1年を通して温暖な気候である。	
人口	4,266,000 人	2008年(ほぼ四国と同じ)
人口密度	16 人/km ²	北海道の人口密度の約 1/4
民族構成	ヨーロッパ人 68%、マオリ人 15%、アジア人 9%、太平洋諸島人 7% (ニュージーランド人 13%)	2006年国勢調査 「ニュージーランド人」は、自らをニュージーランド人とする人で、そのほとんどがヨーロッパ人
宗教	英国国教会 14%、カトリック教会 13%、長老派教会 10%、メソジスト 3%、バプティスト 1%、無回答または無宗教 38%	2006年調査
通貨	1 NZ ドル=約 55 円	2008年11月
公用語	英語、マオリ語、ニュージーランド手話	
時間帯	UTC+12 時間 (日本時間+3 時間)	夏時間はさらに+1 時間
GDP	1,777 億 NZ ドル(2007年4月~2008年3月末) (1人あたり 42,000 NZ ドル)	ニュージーランド統計局 ほぼ広島県の GDP と同規模
産業構造	第1次 4% 第2次 27% 第3次 70% (GDP 比) 第1次 7% 第2次 19% 第3次 74%(就業人口)	2006年米 CIA 『The World Factbook』
主要産業	食品加工、木材・製紙製品、織物、機械、輸送機械、金融・保険、観光、鉱業	
主要貿易相手国	輸出：豪 22%、米 12%、日本 9%、中国 5%、英 5% 輸入：豪 21%、中国 13%、米 10%、日本 10%	2007年米 CIA 『The World Factbook』
政府財政規模	約 5.5 兆円	2008年度歳入 東京都予算の約 8割

3) ニュージーランドのマオリ・ツーリズムの概要

<ニュージーランドの観光の概要>

- ・ オーストラリアやニュージーランドでは、1950年代末に長距離ジェット機による定期航空路線が開設されても、しばらくの間は、インバウンド観光が遅れていたが、1988年のオーストラリア植民200年祭やブリスベン万博をきっかけに大きく増加をし始めた。近年では、ロード・オブ・ザ・リングなど世界的なヒット作の映画のロケ地として有名になったことやエコツーリズムなどが、観光魅力をアピールするのに貢献している。なお、ニュージーランドを訪れる海外客の約4割がオーストラリアを訪問している。
- ・ 海外からの旅行者数は、ニュージーランドの人口約430万人に対して、約226万人(2008年度)となっている。これは日帰り・宿泊併せた国内旅行者数の約4,087万人と比較すると18分の1程度(下左図)だが、海外客の増加と1人当たり滞在泊数が17泊から21泊まで伸びたこともあって、総宿泊数では、国内客を海外客が上回るようになってきている(下右図。海外客の消費額は、約61億NZドル(約3,400億円)と国内客の消費額約51億NZドル(約2,800億円)を上回り、現在のニュージーランドの観光産業におけるインバウンドの重要性は極めて高い。
- ・ なお、両者を併せた観光収入はGDPの約6%を占め、関連産業も含めると観光がニュージーランドにとって大きな産業であると言える。



旅行者数の推移 (各年4月～3月)

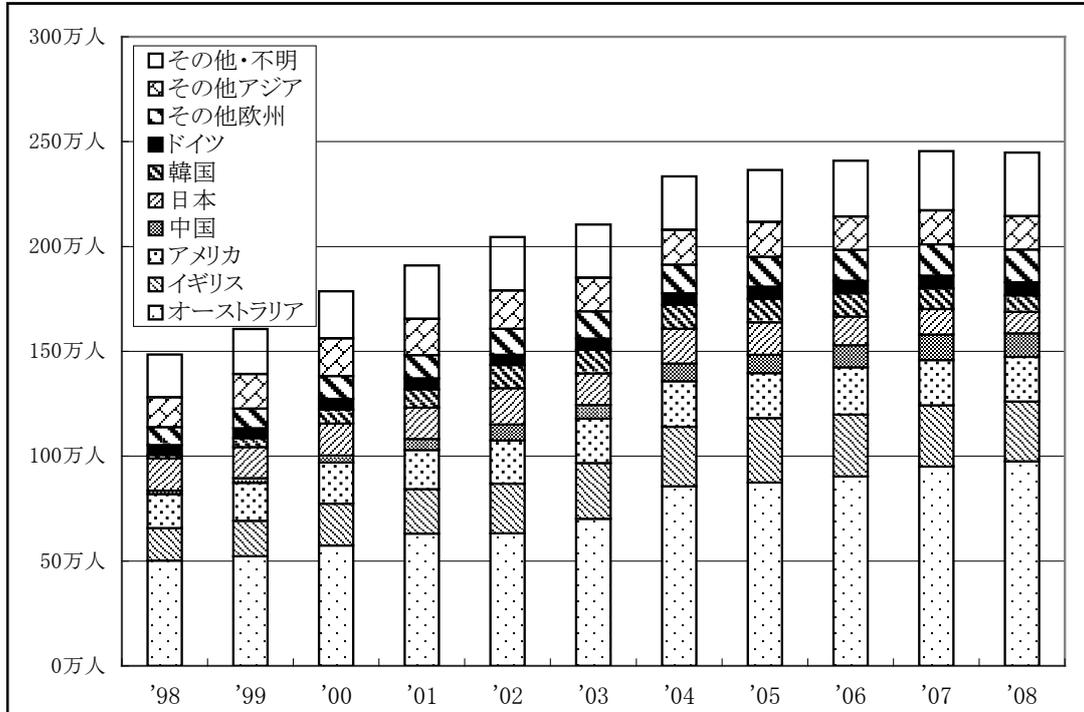
宿泊数と消費額の推移 (各年4月～3月)

資料: "Domestic Travel Survey", "International Visitor Survey" Ministry of Tourism

3. ニュージーランド・マオリ編

『コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究』CATS 叢書 Vol.3

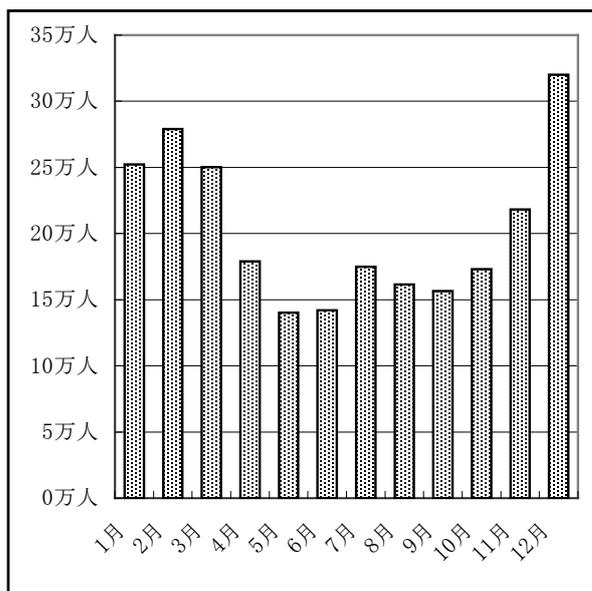
- 海外客の発地上位5ヶ国は、オーストラリア（40%）、イギリス（12%）、アメリカ（9%）、中国（5%）、日本（4%）となっており、特に中国は10年間で7倍近くに伸びている（下図）。



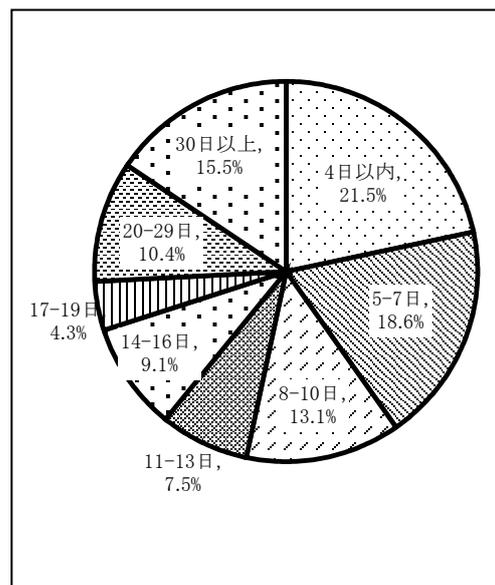
海外客の内訳の推移

資料：“International Visitor Survey” Ministry of Tourism（以下、次頁図まで）

- 時期別の海外客数では、夏季の12月～3月で年間の45%が訪れている（下左図）。
- 滞在日数は、長期が多く、11日以上滞在する海外客が半数近くを占める（下右図）。

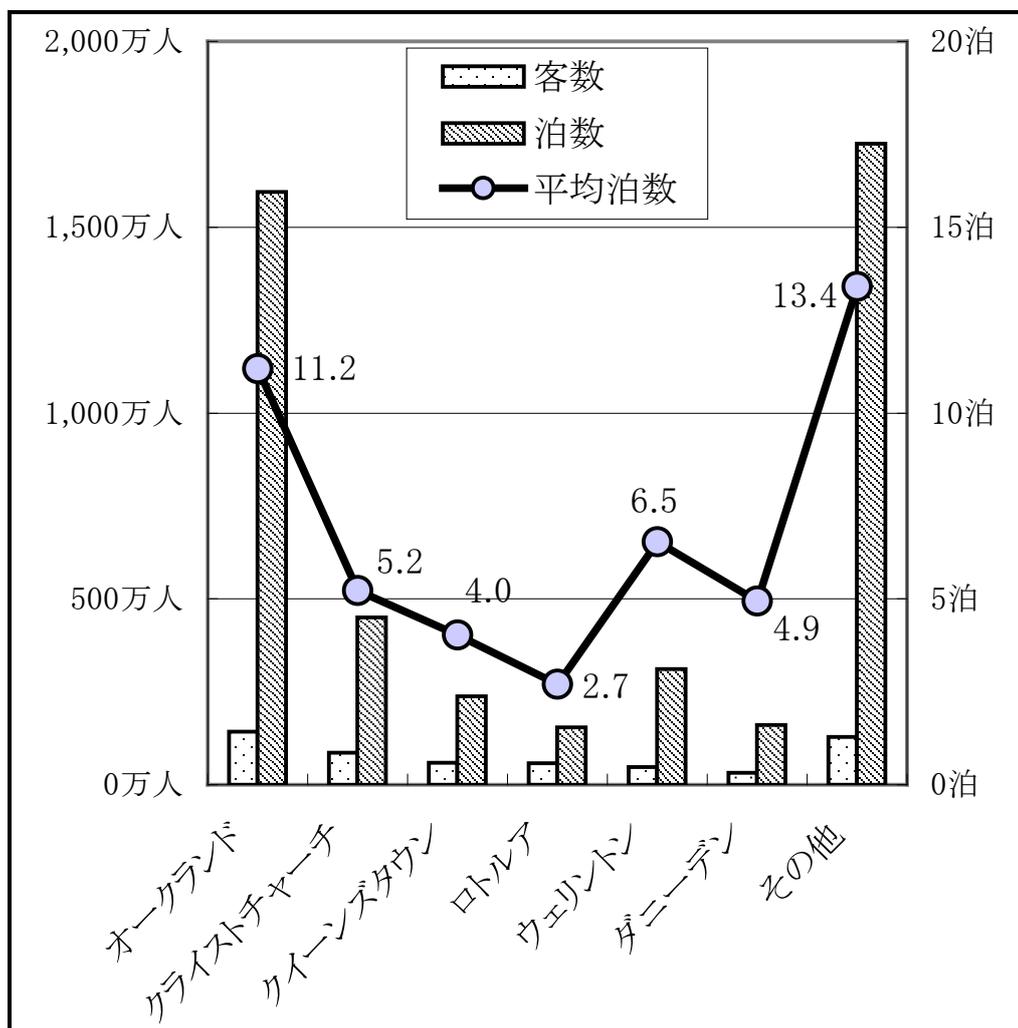


月別海外客数 (2008年)



海外客の滞在日数

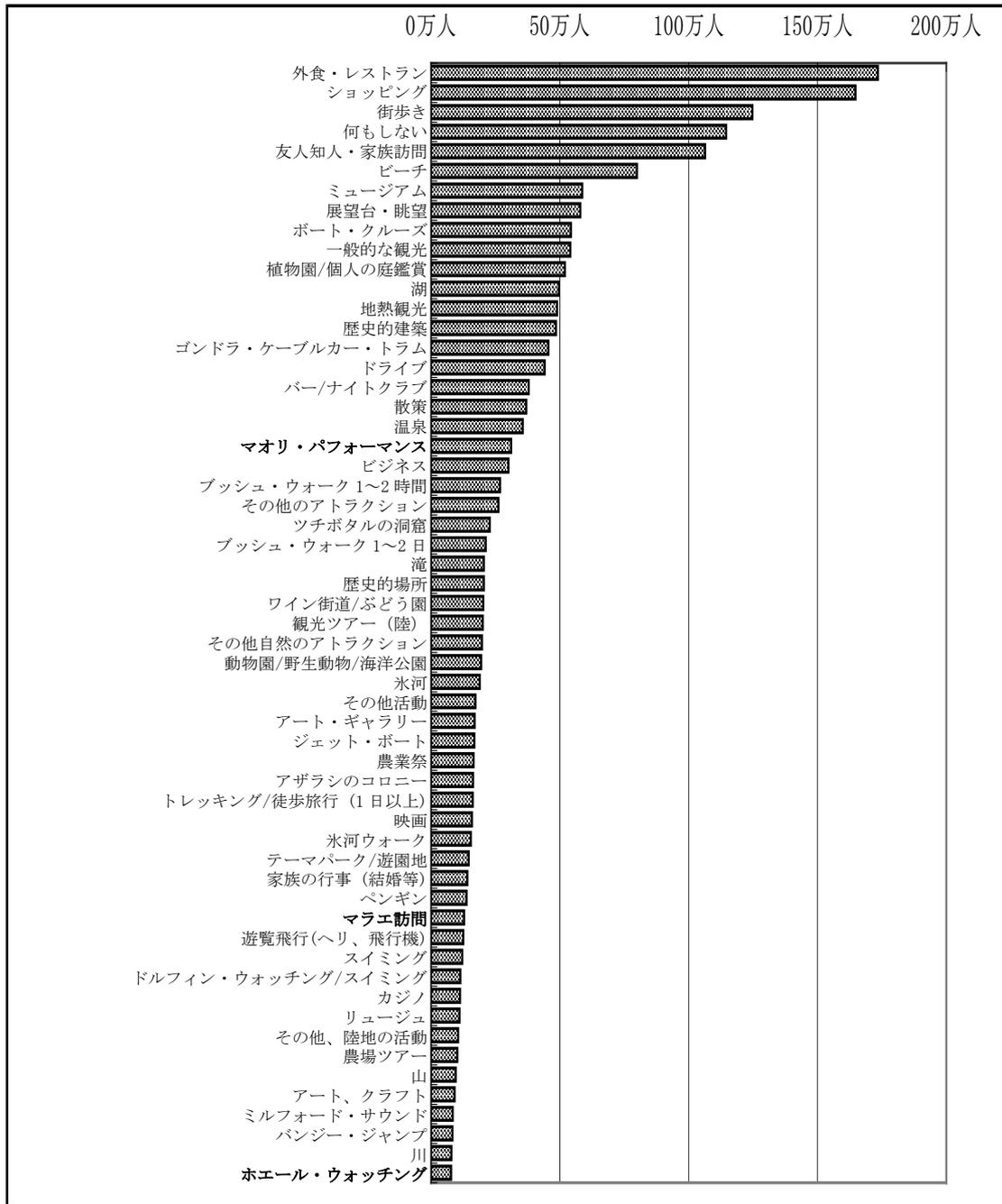
- ・ 観光地別の海外客数では、大半の航空機が到着するニュージーランドの玄関口であり、また最大の都市でもあるオークランドに 142 万人が訪れ、宿泊数でも 1,600 万泊と、他を引き離して多くなっている（下図）。
- ・ クライストチャーチ、クイーンズタウンといった大都市がそれに続き、マオリ観光と温泉で有名なロトルアは 57 万人でそれらに続くが、宿泊数は 154 万泊で、平均宿泊数は 2.7 泊と、相対的に短い。
- ・ 海外客の活動では、一般的な観光行動に混じって、アウトドア・スポーツや野生生物鑑賞などが目立っている（次ページ図）。



観光地別海外客数 (2007年4月～2008年3月)

3. ニュージーランド・マオリ編

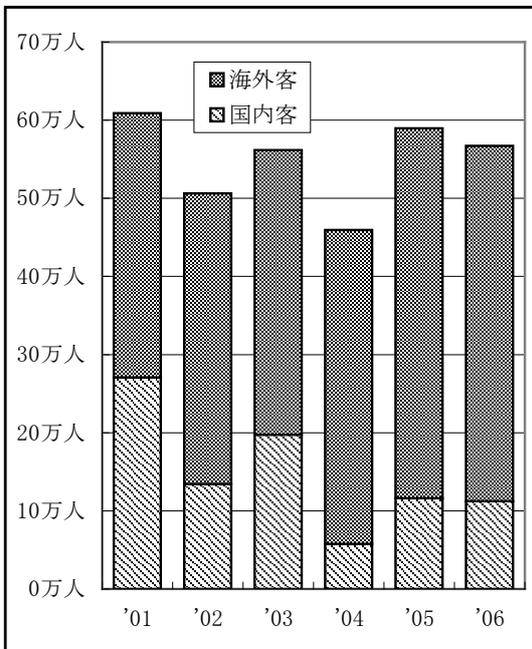
『コミュニティ・ベースド・ツーリズム事例研究』CATS 叢書 Vol.3



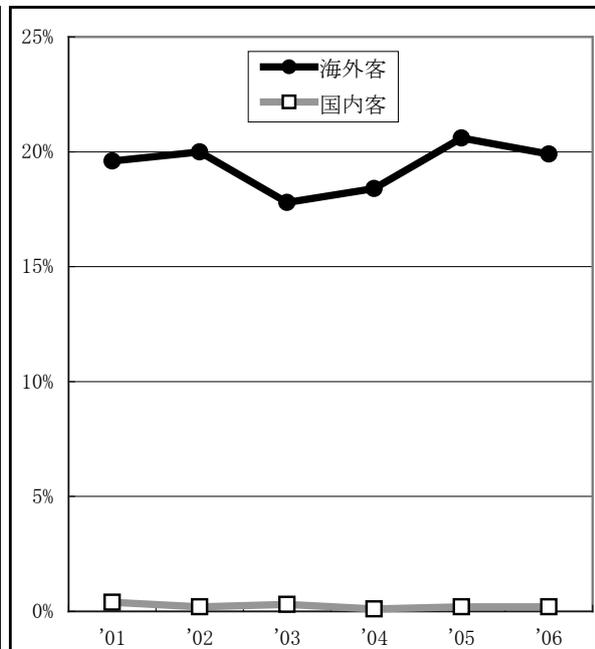
海外客の観光行動 (2008 年 4 月~2009 年 3 月)

<マオリ・ツーリズムの概要>

- ・ マオリの観光の歴史は、ヨーロッパ人が到来するよりも早く、ロトルア地域の温泉の効能を求めて、全国からマオリが旅をして訪れるようになったときから始まっているとされる。ヨーロッパ人に対しても、この地に住む部族であるテ・アラワ族の伝統的な旅人の受け入れ作法の延長線上にあったようである。
- ・ ロトルア地域には、当時、世界八番目の不思議と讃えられたピンクテラスとホワイトテラスと呼ばれる階段状の石灰棚があり、1830年頃からヨーロッパ人が観光に訪れるようになった（公式の旅行者の記録は1970年代が初。二つの自然のテラスは、1886年に起こったタラウェラ山の大噴火により破壊された）。
- ・ ロトルア地域は、土地が痩せていて、アクセスも不便なため、他のニュージーランドの地域と異なり、ヨーロッパ人が移住しようと思わなかった。そのため、ロトルア地域の観光の経営は、当初からマオリのファナウ（拡大家族）やハプ（準部族）が行い、この頃からマオリのガイド業、宿泊業、土産物業が発展し、マオリ文化をベースとした歌や踊りなどのパフォーマンスも行ってきた。また、交通手配や料金設定、テラスのイメージ保護のため写真や描画の管理など、当時からこの地域の観光をうまく管理していたようである（資料：Ngaroma Tahana, Karen Te O Kahurangi Grant, David G Simmons, John R Fairweather "Tourism and Maori Development in Rotorua" Tourism Research and Education Centre (TREC) Report No. 15, Lincoln University, February 2000）。



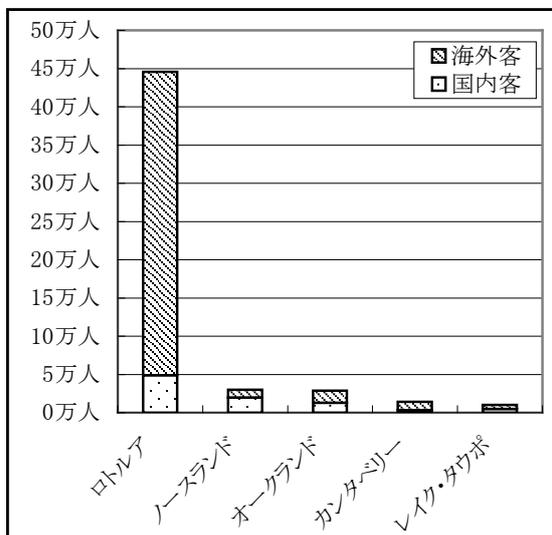
マオリ文化観光客数



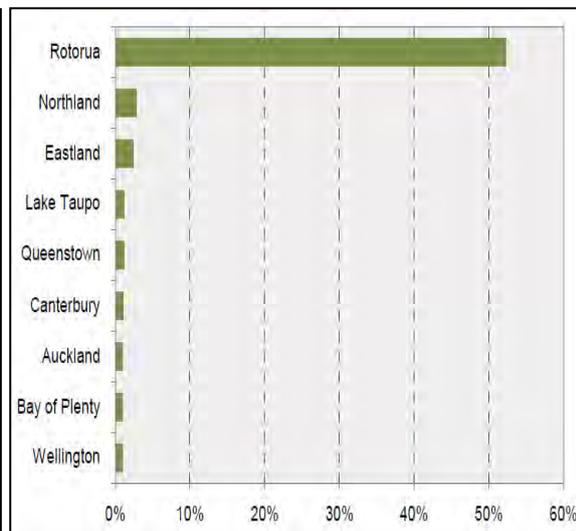
マオリ文化観光体験率

資料：“Domestic Travel Survey”, “International Visitor Survey” Ministry of Tourism

- ・ その後、現在に至るまでマオリ文化を資源とする観光は、ロトルアを中心としてきたが、近年、ガイドツアーやマオリ文化をベースとした新たな祭りであるマタリキ祭などが、ロトルア以外の地域で行われるようになるなど、マオリ・ツーリズムは全国的な広がりを見せつつあり、国内客・海外客合わせて、毎年約 60 万人が体験している（前ページ左図）。
- ・ ただし、海外客がマオリ文化観光を体験する割合は 20%前後であるが、国内客はわずか 0.2%前後に過ぎない（前ページ右図）。
- ・ マオリ文化観光を体験する地域を見ると、ロトルアが約 45 万人で全国の 77%のシェアを占める（下左図）。またロトルア訪問者の半数以上がマオリ文化観光を体験しており（下右図）、現在もマオリ・ツーリズムにおけるロトルアの地位は重要である。



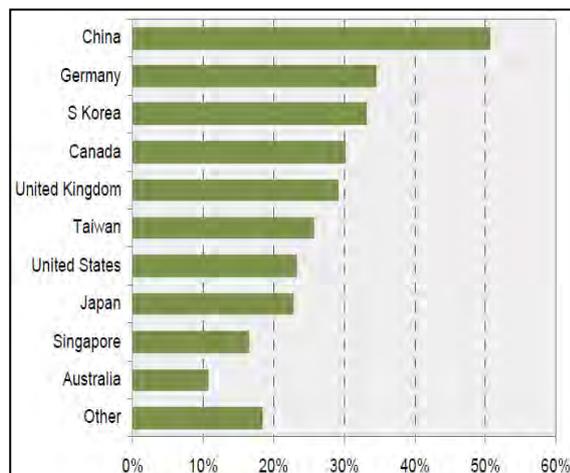
地域別マオリ文化観光客数



地域別マオリ文化観光体験率

資料："International Visitor Survey" Ministry of Tourism

- ・ 海外旅行客の国別に、マオリ文化観光の体験率を見ると、ニュージーランドを訪れた中国人の半数以上が体験していることがわかる（右図）。
- ・ ドイツ、韓国が 30%台でこれに次ぐが、オーストラリアは 10%程度と低い。



国別マオリ文化観光体験率

(2) ニュージーランド 現地視察調査の日程

調査旅行の期間：2008年10月19日～10月31日

参加者：北海道大学観光学高等研究センター 山村

財団法人日本交通公社

小林、相澤、緒川

ガイド・通訳：藤澤ゆうふう氏(10/20～28)、加藤タカシ氏(10/29～30)

アレンジ：ジェネラル・トラベル社（ニュージーランド）

■旅程表

日付	旅程
19日 (日)	成田空港→(オークランドへ)
20日 (月)	(機内泊)→オークランド→クライスチャーチ(タマキ・ヘリテージ・ビレッジ)
21日 (火)	クライスチャーチ(タマキ・マオリ・ビレッジ創業者インタビュー)→カイコウラ
22日 (水)	カイコウラ(マオリツアー体験、旅人の木インタビュー、マオリツアー社インタビュー)
23日 (木)	カイコウラ(ホエールウォッチング、ホエールウォッチ・カイコウラ社インタビュー、カイコウラ市グリーン・グローブ21担当者インタビュー)
24日 (金)	カイコウラ→ブレナム→ウェリントン(ニュージーランド・マオリ・ツーリズム・カウンシルインタビュー、国立博物館テ・パパガイドツアー参加)
25日 (土)	ウェリントン(ピピテア・マラエ)→ロトルア(タマキ・マオリ・ビレッジ等)
26日 (日)	ロトルア(温泉観光施設ヘルズ・ゲート、トラベル・インフォメーション・センター、トゥノホプ・マラエ、ミタイ・ビレッジ等)
27日 (月)	ロトルア(マオリ美術工芸学校テプイア、ファカレワレワ・サーマル・ビレッジ等)
28日 (火)	ロトルア(ファカレワレワ・サーマル・ビレッジ営業開発マネージャーインタビュー、マオリ語教師インタビュー)→オークランド
29日 (水)	オークランド→ワイポウア(ワイポウアの森、樹齢数千年のカウリの巨木)→オポノニ(フットプリント・ワイポウアインタビュー)→ワイポウア(ナイトツアー参加)→オポノニ
30日 (木)	オポノニ(フットプリント・ワイポウアインタビュー)→オークランド(オークランド市内喫茶店にて現地研究会実施)
31日 (金)	オークランド→関西空港

(3) ニュージーランド調査 研究会

1) 現地研究会

日時：2008年10月30日金曜日 17:00～19:00

場所：ニュージーランド・オークランド市中心部ホブソン通りの喫茶店

出席者：北海道大学観光学高等研究センター

山村 高淑 准教授

財団法人日本交通公社

小林 英俊 常務理事

相澤 美穂子 研究員

緒川 弘孝 客員研究員

○コミュニティとプライドに基づいたツーリズム

小林：今回、視察できたところはどこも適切なところでした。全体の印象をはじめに話しましょう。コミュニティ・ベースド・ツーリズムという観点から見ると、ニュージーランドは非常に参考になりました。思っていた以上に収穫がありました。マオリでは、ツーリズムの重要性の理解が進んでいました。日本では、ツーリズムに対する理解が、まだまだ表面的で、物見遊山か金儲けのツールとしてしか捉えていない人が多いと思います。最初に、マイク・タマキが、「ツーリズムは、ビークルだ」と言った話がすごく印象的でした。みんなツーリズムを通して、何をやるかということをお話していました。日本では、そういうことを語る人が、事業者や自治体にほとんどいないですね。そこが非常に勉強になりました。

それから、チャリタブル・トラスト（主に公益的な活動やそのための支援を行う非営利組織）という組織が、何度も出てきました。みんなを巻き込んで、みんなに利益がある仕組みをつくれるかどうか、今後、日本で適用する場合の課題だろうと思います。仕組みまで、どうやって落とし込めるかを考えないと、理念だけでは、しょうがないわけで、そこが我々の課題だろうと思います。

私は、今回の旅でマオリの皆さんを尊敬しました。基本的に自分たちの民族や文化に誇りを持たないと観光は成り立たないと思うのですが、短い時間、特にワイポウアの森のエコツアーをやっているコロさんのところは4年ぐらいしか経っていないのに、それであれだけの自信と誇りを持てるよ



ワイポウアの森のナイト・ツアー

うになったというのは、すごいと思いました。そういう意味で、観光の原点に戻って、観光で何が大事なのかということのを改めて確認できました。

山村：同感です。私は、全体を通じて、気になったキーワードを挙げていったら、10個になったので、それを紹介します。ざっと羅列すると、「コネクト」「パッション」「インヴォルヴメント」「トラスト」「リスペクト」「シェア」「パートナーシップ」「トゥモロー」「ビークル」「マナ」です。この中で「トラスト」には、信用するという概念も含まれているのかなという気がします。

今回の調査を通じて、最終的に日本に当てはめられるモデルをつくっていかないといけない。そのときに、トラストというのは、非常に参考になるのではないかと思います。トラストがニュージーランドでうまくいった背景には、直感的に二つあるのかなと思います。一つは、移民のキリスト教的な慈善の感覚。もう一つは、ファナウ（拡大家族）、ハプ（準部族）、イウィ（部族）に至る血縁のコミュニティに根を下ろした、自分の所属する先、魂の在り処というものがどこにあるかが、はっきりしているマオリの感覚です。家族という概念を拡張していく中で、自分の属するコミュニティをうまく理解して位置づけられるということが非常に重要だと思います。それを日本に当てはめると、我々はどちらも、非常に難しい。じゃあ、一体どうすれば良いのか、というところが議論のテーマになってくるのかなと思います。

掘って立つべきコミュニティを、マラエ（マオリの集会場であり祭祀場）やファナウなどを通じて、マオリの人たちは明確に持っています。それがすごく重要だと思います。根本的なところに家族がしっかりとあって、そして、コミュニティの最小単位の家族というところからしっかりと考えていかないと、コミュニティ・ベースド・ツーリズムというのは難しいのだと思います。ファミリー・ビジネスとか、スモール・ビジネスという言葉が、非常によく出てきました。ビジネスをしていく単位も、突き詰めるとファミリーです。それは、今後、個人単位をツーリズムが重要視していく中で、個対個の関係性を保つ上で、一番良いやり方だとおっしゃっていた方がいた。それはまさにその通りかなと思いました。その辺を考えていくと、ファミリー、ファナウ、トラストといったものを、より理解できる気がします。

小林：もしかしたら、逆にツーリズムが、家族の再構築のきっかけになってくれるんじゃないかとも思っています。崩れちゃったものを再構築するきっかけに、ツーリズムがなれば面白いと、ツーリズムに期待しています。正直に言って、難しい部分もあると思います



ロトルア・オヒネムツのマラエ

が…

相澤：私が印象に残ったのは、「プライド」という言葉です。ツーリズムが、部族の誇りを守るためのツールであるということ、何人かの方が言われていて、印象に残りました。「ペニー・ハカ（昔、西洋人がマオリの村を観光で訪れ始めた頃、村人が歓迎の踊りである「ハカ」を踊り、1ペニーをもらっていたことから、観光用のハカのことを指す）」の話がありましたが、それが恥ずべきことではなく、誇りを失っているわけでもなく、観光客に対して迎合して何かを変えているわけでもなく、やっている。逆に誇りを持ってやっているというようなことが、日本ではできていないなと感じました。部族を日本でどのように適用するかというのが難しいですね。今後どう展開していくかは、何を誇りとして共有できるかにかかっていると思います。

小林：誇りのないところにツーリズムはないのですが、そういう原点に帰らずにツーリズムをつくろうとしているところが間違っていると思います。ツーリズムは、誇りを取り戻す運動で、そういうことがぐるぐる回って行くんだと思う。ツーリズムがうまくいけば、誇りが育つし、その誇りがツーリズムの魅力になる…というように。最近、誇りということが観光において、如何に大事かということ語るべきだと思っています。今回、そういうことを感じました。

○百年後を考えるツーリズム

緒川：今回の調査のポイントを、6つぐらい考えてみました。一つ目は、小林常務がおっしゃられたことと同じなのですが、観光や地域振興よりも上位目的を持っているということです。マイク・タマキさんは、マオリ文化を伝えたいという目的が上にあるので、観光はその道具だということでした。コロさんの話も、ブータンでの話に似ていると思うのですが、地域の幸福が上にあるので、観光はそれを実現するための道具だということです。そういう上位の目的があって、観光に対する考え方や哲学がしっかりしています。

二つ目のポイントは、それとも重なるのですが、「観光振興」と「マオリ文化の保全」の二つのバランスを保つ感覚を持っているということです。自分たちでは、あまり意識していない、というよりも、観光が文化を壊す可能性について、あまり心配をしていない様子でした。今日、コロさんが「タイミング」とおっしゃっていましたが、もしかしたら、ラスト・チャンスだったかもしれないですね。伝統的な文化を維持する感覚をまだ失わずに持っている、自分たちの文化を守るのは当たり前だという感覚が残っている、もしかしたら最後の世代かもしれません。そういうタイミングで、自分たちで観光をマネジメントするチャンスを掴んだ。そしてそれをプライドを育てるために使ったり、若い人を育てるために使ったりした。自然との付き合い方を失いかけていた若い世代も、観光を通じて、自然との繋がりを学び直すチャンスになっている

るかもしれない、と思いました。日本では、自然との関係をかなり切り離されてしまったところがあるので、それをどうやって復活させるかという問題があるかもしれません。

小林：タイミングは大事だと思います。コロさんも、「実は 20 年前から考え方はあったんです」という話をしていました。由布院だって、本多静六が既に 80 年前に「由布院はドイツの温泉地のように、自然と村落の暮らしとを融合した温泉保養地を目指すべき」ということを既に言っているんですよ。だけど、いろんな条件が整わないと、形にならない。

今日、車の中で聞いた緒川君の話で面白かったのは、イスラエルでは、2 千年間ぐらい使ってなかったヘブライ語を復活させて、今では、みんな普通にしゃべっているという話。多くの先住民族言語は危機に瀕しているけれど、百年単位でものを見て、情熱があれば、復活できると思った。その話を聞いて、タイミングというのは、与えられるものだけれど、つくることができるものでもあるということ、改めて思った。

緒川：イスラエルでも、1 人の情熱ある人から始まったんです。ヘブライ語を復活させるにあたって、現代社会の新しいものに対応した単語を何万語も作ったんです。昔のユダヤ人だったら、こういう風に新語を作るだろうと推測しながら。

小林：伝統は大事だけれど、今に生きるものにするには、どうしたら良いかということですね。それは凄いことだと思う。それに何年単位で見るか、ということですね。近い現実だけを見たら、「言葉の復活なんて、できるわけない」と言うかも知れないが、「百年単位で見たら、できるんだよ」という話ができる。文化というものは、それぐらいのスパンで見なければいけないのかもしれない。なくすのは簡単だけれど、創り出すのは時間がかかるから…

山村：昨日のナイト・ツアーでコロさんが、五百年後を考えて、カウリの木の種を蒔くという話をしましたが、その五百年という言葉が頭に残りました。普通、なかなか出てこない発想ですね。

小林：日本のエコツーリズムは、あまりそういう話をしないんですよ。南島にニュージーランドのエコツーリズムの権威がいて、そこに行くと、セルフ・ガイドの紙をくれる。それを持って歩くんですが、そこにはこう書いてあるわけです。枯れた木がある。それは多分、まだ百年後も立っている。その頃、あなたは多分、死んでいるだろう。百年後は、どうなっているか考えてみよう。あなたの人生のスパンより、はるかに長いスパンでこの森は生きているんだよ、と。そういうことを考えさせるエコツアーは、極めて少ない。昨日の夜も、哲学的な話をしていました。日本では、ある意味、知識のことしか教えてないわけです。その違いが面白いなと思った。知識なんてものは、帰るときは忘れてしまっているけれど、そこにあるストーリーは覚えている。そういう話を日本でもやっていかないと深みがないですよ。コロさんの話で、もう一つ面白かったのは、自然のパワーとかそういう話じゃなくて、「サイレンス」と言っ

たよね。「それを感じてもらえればいいんだよ」と。とにかく自然の驚異とか、環境の話とか、そういうもっともらしい話になるんだけど、静けさや暗闇を感じて、それを大事にするところから始めて、そこから自分で考えれば良いと言っていたのを聞いて、本当のエコツーリズムだなという気がしましたね。

山村：考えさせるきっかけをつくるということが、非常に大事ですね。知識を与えると、そこで思考が止まってしまうからね。

○民の自立のきっかけとなった大不況と行政改革

緒川：三つ目は、ニュージーランドの1980年代の財政改革の波や小さな政府化ですが、それがかなり、大きな影響を与えたのではないかと思います。実際、カイコウラでは、それがきっかけだと言っていましたが、おそらく、それが官主導でなく、民主主義の大きなきっかけになったのではないかと思います。チャリタブル・トラストというの、政府ではなくて、民間の側での動きです。その頃の行政改革は、失業率が10%を超えるなど大きな傷を残したとも言われていますが、政府は当てにならない、自分自身でやらなければならない、というところに火を点けたのかもしれないと思います。マオリも、その頃、沢山、失業者が出て、深刻な問題になったと思うのです。

小林：それは面白い視点ですね。新潟県の安塚町も合併してなくなるというので、町全体のNPO組織をつくった。このように、マイナスをプラスに活かすきっかけにしたところもありますね。平成の大合併の悪い面ばかり言われていますが、それをきっかけに何ができるかを考えると、一つのチャンスかもしれない。

緒川：秋田県の湯沢市というところに、稲庭うどんで有名な稲庭というところがあります。そこも、平成の大合併のときに大きな町に吸収されてしまう危機感を持って、平成よりさらに前の昭和の大合併前の町村単位での自治区をつくりました。その一つが稲庭自治区です。その区長さんに、お話をうかがったのですが、小学校区単位で2千人ぐらいの今の方が、地域のまとまりがあるし、それをきっかけに、官は当てにならないから、自分たちの地域のことは自分たちで考えて、自分たちでできることは自分たちでやろうという意識が強くなってきたそうです。地域コミュニティのまとまりは、100戸500人があるという山村先生の説がありますが、日本の田舎では高齢化



駅舎を利用したホエール・ウォッチ・カイコウラ社の建物

が進んでいるので、もしかしたら、マンパワーを考えると2千人ぐらいが、良いのかもしれない。

小林：私も、山村先生の“100戸500人説”をあちこちで話していますが、現場でやっている人は賛同しますね。

山村：子供の頃に参加していた地元の神社のお祭りなどを考えてみても、だいたいそれぐらいの単位で動いていました。字ぐらいの範囲でしょうか。

緒川：それぐらいの規模の小学校区単位だと、子供を通じての繋がりもあるし、丁度よいのかもしれない。

小林：いろんな人が入ってきているから、昔の100戸とは違うのかもしれないですね。

山村：顔が見える範囲というのが重要ですね。

小林：少なくとも、あの人は同じ地域の人だとわかる範囲ですね。

○女性がイキイキできるコミュニティ

緒川：四つ目が、女性がイキイキしている印象を受けたことでした。マオリ・イン・ツーリズム・ロトルア（マオリ・ツーリズムの地域組織）の代表の方も女性でしたけれど、マオリのコミュニティは、割とオープンなイメージを受けました。元掛川市長の榛村さんがよく言っているのは、日本の田舎のコミュニティは、女性が生きにくい場所、だから、女性から先に出て行く。それがコミュニティ崩壊に繋がる。ニュージーランドでは、世界で初めて女性参政権が認められた国でもあるし、コミュニティの中で女性が窮屈な思いをしていない印象がありました。コミュニティが生き残るために必要な条件かもしれません。

小林：海洋民族というのは、そういう意味でオープンなのかもしれない。シルクロードなどの交易都市もオープンですね。

緒川：日本だと、過疎だから外の人を入れようと言っても、来ないですね。

小林：来ないし、入れたがらないね。

山村：今まで、あまり“コミュニティと女性”というテーマについて俎上に上らなかったですが、女性の地位というのは極めて重要ですね。

小林：特にツーリズムの分野では、女性の方が頑張っていますし、重要ですね。

相澤：ニュージーランドでは閉鎖的な感じがあまりなかったですね。

緒川：日本の田舎のコミュニティでは、女性は発言権がないのに、やる仕事が沢山あったりしますね。今の若い人たちには耐えられない…。

小林：確かに女性の地位が違うのかもしれないですね。

緒川：男たちが戦争に行っている間に、女たちがマラエで観光をやって伝統を続けるという話がありましたね。

○過去と未来を繋ぐ現世代の責任

山村：過去と未来を繋ぐという役割があるという話も出てきましたね。過去の伝統を引き継ぐのが自分の責任であり、さらにそれを百年後、五百年後に渡す責任もある。責任だけじゃなくて、文化そのものが自分の中にある。自分が生きていく中で、その自分の中の文化を何らかの形で実現していかないといけない。そういうようなものを感じました。

小林：それは、文字がなかった民族の強さかもしれないですね。今は、文字にできるけれど、そういうものがないところでは、そうやって伝えるしかないですからね。

相澤：昨日のナイト・ツアーで感じたのは、死んだ巨木のところでの話です。生と死の概念が根底にあって、引き継いでいくということから、リビング (Living) の概念が私たちと違うのかなと思いました。死んだ人も、そこから生を与えていくところが、伝統を受け継いでいく概念と結びついているような感じがしました。

小林：日本人も、昔は輪廻などの概念を持っていたのですが、そういうものをどんどん切り離していったのかもしれないですね。

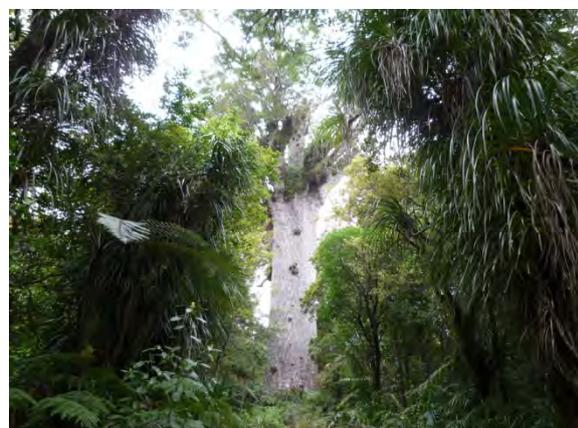
山村：でも日本に来ている外国人観光客は、日本にそういうものを見ているところがありますね。先日、外国人向けの日本のガイドブックを読んでいたのですが、アイボなどのロボットなどの説明のところで、日本人のアニミズムと結びつけて書いてありました。日本人には、モノに魂が宿るアニミズムの感覚があるから、作業用のロボットだけでなく、愛玩用のロボットがある、というような文章が書いてあるんです。案外、私たち自身はそれに気がついていない。

小林：気が付いてないけれど、あるかもしれないね。いろんなものに、そういうものが宿ると思ってないと、愛玩用ロボットなんてアホらしいかもしれない (笑)。

山村：西洋科学で考えると理解できないですね。そういうところを再認識して、我々自身でアピールしていくことができるかもしれないですね。

緒川：西洋人は、最初、ロボット技術に対してタブー意識があったらしいですね。何か生命を与えるのは、神だけに許されることだということ。

小林：森林の倒木更新みたいなものを解説して、死んだものが次を育てるということなら、日本のエコツーリズムでも話をするんだけど、それを昨日のナイト・ツアーでのように“命のジャーニー”なんだと言うと全然違ってくる。死んで、栄養が次の生命を育む、という話より、もうちょっと上のレベ



樹齢数千年の巨木タネ・マフタ

ルの話なんですよ。あれは面白かったですね。



○文化を通じて楽しんで見る自然

山村：日本のエコツーリズムは、自然鑑賞・自然観察になってしまいますね。こちらでは、自然と人間が対等っていて、その付き合い方こそが文化である。自然を見るときは、その文化を通して見なければいけない、ということがよくわかりました。

ワイボウアの森での巨木を鑑賞するベンチ

小林：違う文化でも、その見方は自然を見るヒントになりますね。それに自然鑑賞の仕方について見ても、ワイボウアの巨木のところにベンチが置いてありましたね。ツーリズムができることは、巨木をゆっくりと感じる場と時間を提供すること。そこで、感じるのは旅行者自身、といったように。

緒川：ああいうベンチの置き方を見ると、作り手が楽しみ方を知っているような感じでしたね。

小林：ホキアングのホテルでも、木の下にベンチが置いてありましたね。

山村：あそこでお茶を飲みましたが、最高に気持ち良かったです。

小林：あの木も命を感じる木で、その下にベンチがあって、しかも、材質感が同じなんですよ。

山村：ベンチの背もたれが、魚の形にくり抜いてあった。

緒川：それも絵心があって良かったですね。あの場所に木があることも良いですね。私は、あの場所に木がない風景を想像したんですが、全然ダメですね。

山村：マオリ・イン・ツーリズム・ロトルアのルネさんが、言葉が通じなくても、触ってもらって感じてもらえば良いんだと、言っていました、まさにそれですね。

小林：マオリの人たちに教養、素養があった。江戸時代の日本人が持っていた品格というものが、ヨーロッパなどに行っても尊敬されていたように、そういうものをマオリは未だに持っているんじゃないかと思う。私たちはそうした考え方などの芯の部分に感動したのだと思う。

山村：それは、プライドの問題でもあると思う。自分たちがマオリであることに否定的な感情を持っていたりすると、それは難しい。

○求められるコミュニティの入れ子構造

緒川：五つ目ですが、コミュニティが入れ子構造になっているのが面白いと思いました。

アメリカの社会学者エツィオーニが発表したコミュニタリアン綱領の中で、一つのコミュニティの権利ばかりを大事にし過ぎると、下手すると地域エゴになってしまうというようなことが指摘されていました。他のコミュニティと対立することにもなりません。そうした場合に、仲立ちしたり調整したりする立場にあるのが、上位コミュニティです。マオリの場合は、拡大家族である「ファナウ」、その複数のファナウからなる準部族である「ハプ」、さらにいくつかの準部族からなる部族「イウィ」というように、コミュニティが入れ子構造になっていました。そういう上位コミュニティがあると、コミュニティに問題があったときに、上の公の視点から調整することができません。公の概念も、小さいものから大きいものまで入れ子構造になっているんですね。

小林：それは面白いですね。それがないと暴走してしまう可能性がありますね。暴走しているものを止めるときに、その上のものがあるかないかで変わる…。

緒川：一つのコミュニティが健全に機能しているだけでなく、上位のコミュニティも健全に機能していないと、間違った方向に行くのを正すことができない可能性があります。

小林：マオリだとコミュニティが活着しているけれど、そうでないところは、どういう風にすればいいんだろう。公益性について、日本人は鈍感なところがありますから。そういうところで、上位の公の概念がないと問題がある。上位の公の概念がないと、どこかで折り合いを付けるということができずに、個人の権利の方が正しい、というような話にもなってくる。確かに「コミュニティが大事だ」というだけでは解決できないというその視点は、大事だと思う。

山村：そのマオリの入れ子構造も非常に面白いのですが、一つの地域を見ると、そこにマオリかノン・マオリかとはまた別の切り口の、いくつかのコミュニティが入れ子構造になっている点も興味深かったですね。

緒川：縦糸と横糸のような感じですね。

小林：同じ地域にいくつかのトラストが重なっていましたね。ある意味、抑止力にもなっているし、互いに協力関係にもなるし、両方にメリットがある。

緒川：地域の中で人間関係が淀みがちなところに、別の切り口の組織があると、風通しが良くなりますね。

小林：コミュニティの再構築の難しさは、そこにもありますね。一つのコミュニティをつくるのでさえ大変だから。入れ子構造でつくるのはさらに大変。

山村：私の田舎では、自治会の班の下部に、10数軒程度からなる隣保（隣組。隣保組織）があります。面白いのは、近所に某自動車の本社があるのですが、そこに転勤で転入してきた人も隣保のメンバーになる。そしてお葬式も手伝いに来てくれます。隣保の上に班があってその上に字、そして字が4つ集まって昔の村の単位があります。さらにこの字の単位ごとに神社があって、お祭りもあるんです。

小林：それはマラエと似ていますね。

山村：私の感覚からすると、マラエは自分の子供の頃の神社と重なるんです。境内の中でお祭りのお囃子の練習をしました。先輩や上の人から教わるんです。そういうことが、日本にもちゃんとあったと思うんですが、それが戦後、メチャメチャになってしまって、地縁社会がなくなって、会社・職場が本位になってしまった。そうすると職場は男性社会だから、当然、女性や子供が切り離される。結果、地域の中で女性や子供がどうしたら良いかわからなくなる。そのあたりが、戦後日本の大きな問題だと思います。

小林：戦争のときに、隣保＝隣組と言いながら監視組織にしてしまって、それへの反省が逆に行き過ぎたというのがありますね。

緒川：掛川市では、新幹線の駅を新設するときに、市内の各家庭が10万円ずつ寄付して大きな力になりました。それもコミュニティの組織がしっかりしているからです。しかし、コミュニティの縛りがキツイと、それはそれで住みにくい地域になってしまいますね。

山村：あそこは、お金を出してない…となりかねないですからね。噂もあつという間に広まってしまいますし…。

小林：良い面と悪い面と両方ありますね。

相澤：札幌から小さな町に引っ越したときに、常に監視されているような気がする、母は具合が悪くなったみたいですね。男の人は働いているので、職場に居る時間が長いですが、専業主婦などだと、女性は直に地域コミュニティにさらされているので、きついところがありますね。

○「エコツーリズム＝コミュニティ・ベースド・ツーリズム」となるべき

山村：コロさんに聞いた話では、ビジネスのコミュニティ、マオリのコミュニティ、地縁のコミュニティなど沢山あって、そういう人たちが集まって話し合う機会がある。いくつかのコミュニティがあって、その間で共同歩調が取れる場もある、というのも興味深かったですね。企業自体も、自分たちの利益だけでなく、その上位目的のところに利益を還元する考えがあるようでしたね。

小林：日本のエコツーリズムの会社でも、地域のためという考えはありますが、なかなか実践できないし、地域の側でも受け入れてくれない場合が多いですね。もっと地域のためにできるのに、なぜできないんだろうと疑問を持っている人が多いようです。

緒川：地域というのが、単なる行政界になってしまっているところがありますね。マオリは、何か地域というものに実体的な感覚を持っていますね。

小林：地域に対する考え方の違いというのがありますね。欧米のエコツーリズムの本に「地域のために何ができるか考えよ」と書いてあると、それは自分の仕事と全然関係

ないことでも、地域で問題があったら、それを一緒に考えることを意味している。でも日本では、エコツーリズムに直接関係するような、例えば自然の保護とか利用とか、そういう地域の問題しか考えない。その本を読んでいると、「そのコミュニティが困っている課題について、考えたことがあるか？」という質問があって、認定基準の項目に入っていたりする。それは凄いなと思った。西表島で、早くからカヌーのツアーを始めた中神明さんは、地元の公民館活動を一生懸命やっているんです。それをやらないと地域から受け入れてもらえないし、やっているうちにどんどん面白くなって、地域活動をやっている。

飯田のエコツーリズムがうまくいっているのも、地域の公民館運動がベースにあるからです。それがしっかりとしてあるから、観光が集落に受け入れられる。観光公社をつくただけではできなかつたし、やはりコミュニティがベースだなと思う。資源が特別豊かなところを除くと、エコツーリズムは、コミュニティ・ベースでないと成り立たないと思う。環境とツーリズムに対してコントロールできるのは、地域のコミュニティがしっかりしているところであって、それがないと好き勝手やられてしまうと思う。外から来てエコツーリズムをやっている人に、「その場所に責任を持つ」と言っても難しい。それで資源が荒れたら、別の場所に行ってしまうかもしれない。コミュニティの人が、「ダメだ」と言えるように、コミュニティがしっかりしたところじゃないといけないと思う。

○輸出できる“エクスポート・レディ”の観光クオリティ

緒川：六つ目は、国内市場が小さいことです。だから必然的に海外市場を相手にせざるをえない。そうすると、最初から競争が厳しい世界に入らなければいけないので、鍛えられる面があります。

小林：それはものすごく大事で、日本のほとんどの産業が、国内市場が大きいおかげで甘えてきたところがありますね。ところが、国際競争にさらされるようになってきた。特に観光業は、国内客しかいないと言っていたので、国内基準でしか考えていなかった。そこは、これから変わってくるだろう。

緒川：製造業などでも、国内市場が小さい韓国が頑張っていて、世界市場で日本の企業は苦戦していますね。ニュージーランドで、お土産物を見ても、センスがあるものが多いし、世界に通用するものを考えているように思いま



ファカレワレワ村のマラエ

す。

小林：ツーリズムの範囲についても、もっと広く考える必要があるのかもしれないですね。観光客だけでなく、年に1回スキーに来る人、別荘を持っている人なども、入れて考えて良いのかもしれない。日本だとあまりそういう人たちを入れて考えないでしょう。そういう議論をしている中で、もっと広い視野で考えられることもあるかもしれない。何がスタンダードだという考え方も、変わってくるかもしれないですね。

緒川：ブータンでも、国内市場がないに等しいから、国際的な品質基準を意識していましたね。

小林：日本の観光も、明治のときは、そうだったんですけどね。

山村：戦争が終わって、旅の大衆化が急速に起こって、それがこの数十年間続いている。

でも、この状態の方がむしろ普通じゃない状態であって、これから先は以前のように海外市場を見る必要が出てくるのでしょうかね。

小林：異常な状態だと思っていないのかも知れませんね。昭和のはじめの頃は、金持ちが結構、ヨーロッパに行っているんです。戦争がなかったら、上流階級の旅文化が日本で育っていたかもしれない。ところが、実際には大衆化が良いことのようになってしまった。ヨーロッパのように、上流階級の人が旅のモデルを示せば良かったけれど、大衆の旅行の方ばかり向いてしまったから、面白くなくなったところがある。質の良い旅文化を創っていかないと、ツーリズムに対する尊敬とか、ツーリストに対する尊敬は出てこないと思う。

山村：日本のものは、ある意味、悪平等みたいなところがありますね。こちらでは、例えば、ルネさんが、マーケットを明確にセグメントに分けて考えていました。日本では、みんな、お客さんは神様だという考え方ですね。

小林：誰でもいいから、できるだけ来てくれればいいというようにね。

山村：望ましいお客さんにだけ来て欲しいと、あれだけハッキリ言っていたのが、すごいなと思いました。そういうマーケティングが、日本ではまだまだできていないですね。

緒川：特に公のセクターでは、やっていないですね。

相澤：話を聞いていると、マオリでは、結構、調査やデータに基づいたマーケティングをしていますよね。部族などを説得するとき、根拠となる資料が必要だということもあるのではないのでしょうか。

小林：その気にさせるには、パッションも必要だけれど、ロジカルな部分も大事ですからね。日本はロジカル・シンキングに弱い。

山村：タマキさんが言っていた、「80%の感情と20%のロジック」ですね。

小林：コロさんだって、ビジネスを始める前に1年間、調査をしたと言っていましたね。仕事がなく故郷に帰ってきて、それでも1年間、ウォッチングしていたというのがすごいと思った。タマキ・ビレッジでも、ミタイ・ビレッジでも、場を盛り上げなが

ら、お客さんにどこから来たか聞いていたけれど、あれもマーケティング調査の一種じゃないかと思いますね。あれを毎日やっていれば、どこからどれぐらいのお客さんが来ているかわかりますからね。

緒川：ロトルアでは、お店でモノを買うと、どこから来たかと聞かれましたね。ロトルア博物館でも温泉でも聞かれましたし。

山村：あれはマニュアルがあるんでしょうね。

小林：そういうのは大事ですよ。みんなにマーケティングの発想を植え付けるという点で。

相澤：情熱が大事と言いながら、情熱だけじゃなくて、しっかりしていますね。

小林：それは、緒川君が言ったように、国内市場だけで成り立たないところから来ているのかもしれないですね。ルネさんが、「エクスポート・レディ (Export Ready : 輸出準備完了)」という言葉を使っていたのも面白かった。日本では、絶対言わない言葉。日本では、外国から人を呼んでいる観光地やホテルを、物好きだという目で見ているようなところがある。

○仕組みではなく、“人”が動かしている観光

小林：それにしても、今回も、熱い人が多かったですね。ある程度、成功するには、情熱が不可欠なのでしょうね。ただし、仕組みが出来上がってしまった後に担当者になった人は、少し違う。同じ場所に話を聞きに行っても、どの段階から関わったかによって、聞ける話が全然違った。カイコウラでも、何のために木を植えるかといった当初の目的の話が、以前と違って、あまり明確でなかったですしね。

山村：「システムをつくってしまえば、人が代わっても、うまくいく」という考えもありますが、私はそれは違うと思います。人というものにフォーカスしないといけないと思います。旅人も、「その人に会いに行く」というところがありますから。観光は“付き合い”だと思うんです。

小林：観光は“人”なんですよね。それを“仕組み”にしてしまうとダメですよ。ね。

山村：コロさんも、ワーキング・グループのメンバーは、現場を知っている熱い人だと言っていましたね。

小林：パッションを伝えるには、システムだけでは難しいんですね。

山村：サステナビリティを保つためには、うまくバトンタッチがされています。



ロトルアの観光案内所

かなければ、なりませんから。次の世代、誰を育てるかという意識がないと、難しいです。

小林：カイコウラでも、創成期の話を皆に伝えるようにしていくと言っていたけれど、そのときの気持ちを共有できるようにしないといけないんですよね。

○経済と道徳のバランスを保つ“マナ”の概念

小林：国際化と繋がる話で一つ面白かったのは、ある程度、外国から人が来るようになると、あまり「マオリ文化」「マオリ文化」と前面に出すのではなくて、自然観察などの中に、さりげなくマオリ文化を入れている、という話です。

山村：見せ方の戦略性がありますね。特にマオリのような先住民族が自らを語る際、重要なポイントになるのではないのでしょうか。当然、負の歴史を語る必要もあるのですが、そこを強調しすぎると、入口で興味を持った観光客が引いてしまう。そうすると、結果として良いクライアントを手放してしまうことになります。

小林：「リスペクト」という言葉には、いろんな意味がありますが、「尊敬する」だけでなく、感謝のニュアンスがあったりして、日本語よりもう少し広い意味がありますね。以前、エコツーリズムの本を訳すときに、どう訳したら良いか難しかった。「尊敬」と訳すと狭い意味になってしまうから。感謝の気持ちを持つということに近いかもしれない。

山村：すると、マオリ語の「テナコト (Tēnā koutou)」に似ていますね。面白かったのは、「マナ」ですね。権威 (authority)、影響力 (influence)、力 (power)、威信 (prestige) などを意味するようです。それと、マオリ・ツーリズム・カウンスルやルネさんが言っていた「マナアキタンガ (Manaakitanga)」という言葉がありましたね。それは調べてみると、英語では「ホスピタリティ」と訳されていました。すると、マナとホスピタリティが結びついているんですね。面白いなと思いました。

小林：それは面白いですね。ホスト側がしっかりしている。迎え入れるには、度量が広くないといけない。そういうことかもしれないですね。

相澤：ガイドの方が、テプイア（間欠泉の展望所とマオリ美術工芸学校、マラエ、野外博物館などからなる複合観光施設）ではマナが失われたから、ファカレワレワ・サーマル・ビレッジ（地熱を利用しながらマオリが生活しているロトルア地域の集落）の方に移ったというようなお話をされていましたね。

緒川：文化を守るときに、マナという概念が大きな役割を果たしていますね。経済だけに走って、マナがなくなったら、尊敬されなくなるというように。

小林：マイク・タマキが、ラインがあると言っていたことに関係するかも知れませんね。それを超えてしまったらダメだというようなライン。

緒川：それがマナがあるかないか、なんでしょうね。

小林：いくらビジネスと言っても、マナがなくなったら、金は儲かるかもしれないけれど、自分たちの大事なものがなくなる、というようにね。

山村：文化をどこまで商品化してよいか、その線をどこに引くかの基準ですね。

小林：そういう線が、それぞれの人の気持ちの中にある。

緒川：だから、マイク・タマキに対する評価も、人によって違うんだと思います。私は、マイク・タマキも自分の中にその基準を持っているんだと思います。他のマオリから見ると、行き過ぎだと思っている部分もあるのかもしれませんが。彼自身、宗教的な伝道活動も熱心なようですし、彼は彼なりに経済と道徳のバランスというのを考えているのだと思います。日本の場合は、経済的に稼いでいると、地域の人たちを食わせてるから、それだけで偉いかのように言われることがあって、経済と道徳が対立軸でなくて、一致して考えてしまうようなところがあります。

小林：日本では、経済的な軸が強すぎますね。金儲けすれば、地域の雇用を増やしているから良い奴だというように。全然、違う軸があって、マオリはそちらも大事にしている。

山村：上の層の責任感というか、ノブレス・オブリージュというものがありますね。マイク・タマキもそうですが、成功したリーダーは、お金を儲けたら、何か社会的に貢献しなければいけないという意識が非常に強いと感じました。

小林：当たり前にするんだという感じでしたね。

山村：そこが戦後の日本で失われた大事なものの一つですね。

緒川：二宮尊徳の報徳思想では、「道徳のない経済は犯罪である。経済のない道徳は寝言である。」と言っています。道徳と経済の両立ですが、それは道徳を自然保護か文化保全と置き換えても成り立つものだと思います。

小林：道徳が、こちらの場合ではマナですね。自分が拠って立つべき尊厳を大事にしなければならぬ。それとビジネスとの折り合いをどの辺で付けるかということ。

緒川：日本でも、報徳思想のような思想がある。まったくないわけではありません。

山村：復興しようと思えばできるはずですね。

○観光は、ビークルだ！

小林：それと、「観光は、ビークル」という考え方を、日本でもっと広めたいですね。最終目的は、自分のところの振興だけではないんだということを、もっと考えないと。

山村：「ツール」とか「手段」という言葉よりも、「ビークル」という言葉の



テプイアの間欠泉

方が、わかりやすいですね。

小林：「運んで行くものだ」という意味でね。なるほどと思いました。

緒川：日本の場合、観光振興や経済振興の上位目的を何にするかですね。戦後、「国」を最終目的にすることがタブーになり、欧米に追いつけ追い越せが自己目的化して、それが果たされると目標を見失いました。

小林：山村先生から問題提起があったように、「地域振興」とは何かというときに、地域に金が落ちることではなくて、地域の人々がウェル・ビーイング (Well-being) になることですね。それを上位目的として持ってこないとダメですね。観光によって、皆がどれくらい心豊かに生きられるか、ということに行き着くと思うのですが…。

山村：「ステイク・ホルダー」から、「シェア・ホルダー」へというのが、一つのキーワードになるかもしれません。「シェア」と考えると、何を「シェア」するかという問題が出てきます。それを考えると、上位目的を探せるのかもしれませんが。我々は、何を共有し、分かち合えるのかということ。それは文化かもしれないし、言葉かもしれないし…。

小林：その文化を生かすことによって、どういうことが起こっているかということですね。

○明治に失われたコミュニティの中心

山村：戦争で神社が利用されなければ、戦後、文化のベースとなる良い位置づけになったと思います。

緒川：最近、南方熊楠の「神社合祀に関する意見」という文章を読んだんですが、それを読むと、明治時代に政府が、字ごとにあった神社をかなり潰して、一村一社というように大幅に減らしてしまったようですね。南方熊楠が、神社合祀に反対したのは、環境保護の観点からだけでなく、地域コミュニティが中心を失うからでした。神社は、地域コミュニティの集会場として利用されていましたし、お祭りをやればコミュニティ内で経済が循環する。そういういろんな観点から反対しています。明治時代に、コミュニティの中心となる神社を潰してしまったのは、その後に大きな影響を与えたと思います。

小林：戦後だけでなく、明治時代の政策も尾を引いていると。

緒川：平成の市町村合併よりも、神社合祀は破壊的だったかもしれません。

小林：平成の合併にも私は反対しているのですが、逆に、大きくなってしまったがゆえに、もっと小さな単位も大事にしようという運動になれば面白いと思う。

山村：中途半端な線引きが消えて行くと考えると、昔の藩の時代の区域に戻って行くかも知れません。廃藩置県で引かれた県境は必ずしも、地域の歴史や文化を反映していませんから。案外、かつての律令国（令制国）や藩のまとまりというものが歴史や文

化、アイデンティティの依りどころとして再認識・再評価されるのではないかと考えています。

緒川：その中で、入れ子構造が出来れば良いですね。

○生きた景観と“リビング・ビレッジ”

小林：オーストラリアと比べると、ニュージーランドの方が、よりコミュニティ・ベースだから面白いですね。オーストラリアは、自然資源が凄いから、それをガイドすることに重点が置かれている。ニュージーランドは、マオリ文化を大事にしようとしているだけに面白い。

山村：コロさんが、「我々はガイドだけど、ガーディアンである」と言っていましたね。

小林：森に対する付き合い方が、元々そうでしたからね。今は、たまたま環境保全局が持っている土地だけれど、元々は自分たちの森。オーストラリアとでは、エコツーリズムが違う発展の仕方をしていると感じました。日本も、ニュージーランド型の方向に行かないと、一部を除いてエコツーリズムがビジネスとして成立しないと思う。つまり、文化であり、集落を含めて見せて行くというやり方でないといけない。それは本当の意味でのグリーン・ツーリズムですね。農業体験ではなくて、集落の自然を楽しむというように。地域文化と併せて見せないといけない。

山村：そういう意味で、温泉と文化を併せて見せるファカレワレワは、一つのモデルケースになり得ますね。

小林：白川郷も、入村料を取ってれば、もう少し違うようになっていたかもしれないですね。

山村：そうだと思います。それが日本の伝統的建造物群保存地区制度の限界かもしれません。あまりに建物や街並みに、保存の観点を集約し過ぎているところがあります。周囲の景観や水田がなかなか真っ当な評価をされない。

緒川：それも上位目的がないからですね。何のために景観を残すんだ、何のために建物を残すんだ、というところがないからですね。

山村：その議論がなされないまま、多くの地区が伝建地区になってしまった



ファカレワレワ村のマラエ



温泉と共に生活するファカレワレワ村

と思います。

相澤：最初に保存ありきになってしまっていますね。こちらでは、保存という概念が、意識されているわけではなくて、自分たちの生活の中で、自然に守っている感じですね。

山村：必要だから、守っている。

緒川：それと、マナを守っていると、自然とそれが守られているのでしょうか。

山村：ブータンでも、世界遺産に登録できるけど、我々はしない。だって、使えなくなるじゃない。というようなことを言っていましたね。

小林：だから“リビング・ビレッジ”ですね。そこで生活している様を見せていましたよね。白川郷も本来は、リビング・ビレッジのはず。だけど“合掌造り”のような“モノ”で見せるから、写真を撮るときに、そこにいる地元のお爺さんに「邪魔だから、どいてよ」となる。

山村：西洋の石造りの街並みを保存するやり方と同じなんですよね。建物は石だから、ずっと残れば良いというように。

小林：ハウステンボスもダメだと思いましたね。生活感がまったくない。ヨーロッパの町とは違いますよね。お客さんはそんなことは見抜いてしまう。人が住んでいる面白さとか、猥雑感とか。それが無い街なんて、二回目は行きたくない。

山村：ファカレワレワは、「洗濯物がある風景」でしたよね。ツーリズムがある場所に、地元の子供が来て、私たちが観てるし、地元の子供たちも観て学習する。あの仕組みですよ。仕組みじゃなくて、自然とやっているのでしょうか。あれがまさに、観光を活用した文化の継承の仕組みの一つですね。

小林：だから、「自分たちは続いている」と話していましたね。「ツーリズムについて、どう思う」と聞いたら、「子供の頃からあったから…」と仰っていたでしょう？あれは面白かったですね。

山村：19世紀のガイドさんが尊敬されていましたしね。あのガイドさんたちも、みんな女性でしたね。

小林：さっきまで踊っていた子が、お店にアイスを買いに来たりしてね。

山村：ショーをしている人の素顔を見ることができて、そのギャップも楽しいですね。それも貴州省肇興のトン族の合唱団と同じですね。ショーをやっているときに、地元の子供が集まってきて、我々の隣に座って、一緒に歌いだしていましたね。



ファカレワレワ村の洗濯物がある風景

緒川：鼻水垂らしてね（笑）。

○“オーセンティシティ”ではなく、“マナ”による基準

小林：アロハさん（ロトルアでインタビューしたマオリ語教師）が、タマキ・ビレッジなどでは、知らない歌をやっていると言っていましたよね。観光が盛んになると、そうやって取り入れていって変質してくるんですね。それは必ずしも悪いこととは限らない。それもトン族の観光と同じで、あそこでも周囲の地域の歌を取り入れて練習していると言っていましたよね。

山村：昨日も、コロさんが一番好きな曲というのが、かなり現代風にアレンジされた曲でしたね。マナさえ、しっかりしていれば、その線引きができるのでしょうか。我々は、コレを守っているから、というものがあるのが重要なのでしょうか。

小林：オーセンティシティというのは、外の間人が評論することではないのかもしれないですね。

山村：そうですね。ユネスコの世界遺産でも、最近、「オーセンティシティ (authenticity)」と「インテグリティ (integrity)」というのがキーワードですね。

小林：アロハさんの話を聞いていて、面白いと思いましたね。自分たちがどう思っているかが重要なようですね。私などが観ると、テプイアなどは、随分と簡略化した歓迎儀式のように見えたけれど、アロハさんによると、そうでもないと言う。

相澤：マナの基準が姉妹の間でも、違っているようでしたね。

小林：姉妹が、それぞれファカレワレワとテプイアで別々に働いていましたね。

緒川：割合、大らかな部分があるのかもしれないですね。

小林：それは、生きてる文化だからなんです。基準をキッチリ決めて、そのラインを超えればオーセンティックだとか、そういうことをやること自体、意味がないのかもしれない。

山村：マオリ・ツーリズム・カウンスルでも、オーセンティシティという言葉自体使いませんでしたね。「インテグレイティッド・カルチャー (integrated culture)」と「リビング・ランドスケープ (living landscape)」という言葉を使っていましたね。その「リビング・ランドスケープ」は何かと質問したときに、「それぞれマナが宿っていることが、リビング・ランドスケープだ」と言っていました。ルネさんが、「私たちのビジョン」と言って挙げた5つの項目（強いリーダーシップ、質の高い体験の提供、熟練したスタッフ、相応しい顧客、持続可能なビジネスの5項目）の中にも、オーセンティシティは入っていませんでした。

小林：当然オーセンティシティと言うのかと思っていたら、言わなかったですね。

緒川：つまりオーセンティシティの基準が、形式的ではなく、感覚的に生きたものなのだとということだと思います。

小林：外の方が本物かそうでないかが分かる基準があるのではなくて、自分たちの感覚の中で分かるのではないか。

相澤：失われていないから、オーセンティシティという概念が出てこないのかもしれないね。失われて初めて、「守らなければ…」という動きが出てくるので。

緒川：基準をつくったり、明文化したりして…。

小林：時代によって変わって当たり前なんですよ。

山村：世界遺産でも、オーセンティシティというのは、保護・保全のための基準ですかね。

相澤：こちらでは、失われる危機を感じて、というのとは全く違うようでしたね。

小林：ホテルでやっているショーだって、それを一生懸命やっているんだったら、それはそれで良いというようなことを言っていましたね。

山村：そうでしたね。それも、「まがい物ではない」と言っていましたね。

小林：「あれは違う」と言うのかと期待していたのですが、違いましたね。どこまで、マナに準じてやっているかということですね。もしマナを捨ててしまったら、たとえ形だけ伝統的にやっている村の行事だとしても、実は本物じゃないかも知れない。

山村：惰性でやっているだけかもしれませんね。

○日本が世界に示せる“マナ”は？

山村：逆にマナというものに、どうやって、気づいたらよいか、気づかせたらよいか、という課題がありますね。

緒川：それは難しいですね。意図して作ってしまうと、それは違うものですからね。

小林：それは自分たちのプライドとか誇りの中から自然と出てくる。それを壊したら自分たちではない、というようなものですよ。自分たちで、そういうところを探すしかない。

山村：アロハさんは、そういう仕事はその家族の仕事だと言っていました。お祖父さん、お母さん、私…というように、そこがしっかりしていないと、引き継げないんですね。

小林：だから、社会制度そのものや家族のあり方に基づいているんですね。「お祖母ちゃんが4人の孫を背負ってやっていたのを背中から見ていたから、できるんだ」と言っていましたね。

緒川：日本でも、職人とか京都の人などには、残っているのかもしれませんが。職人のプライドとか、家のプライドといったようなものですね。宗教的なところにも残っているのかもしれないです。神楽とか、魂を込めてやっているものも多いかもしれません。

山村：イウィなども、みんな自分の家系を辿っていけば、祖先のカヌーに行き着く。我々は、そんなことを気にすることは、ほとんどないですね。

小林:それも、マオリの特色かもしれないですね。ニュージーランドに来る前の島でも、そんなことを言っていたのでしょうか。あれは命懸けでニュージーランドに来た人たちに特有のものじゃないか。死と直面する極限の体験をした人同士の繋がりというのが、ずっと生きている気がする。

山村:面白いのは、自分たちのルーツを言うときに、「島」じゃなくて、「カヌー」を言うところですね。日本も、2千年ぐらい前に舟で流れ着いた人が一杯集まっているはずなんです。それが、あまりにも古いので、消えてしまったのではないかと思います。

○公の概念を醸成するマオリのコミュニティ

小林:もう一つ面白かったのは、タマキ・ビレッジが、成功モデルとして見られているかと思ったら、必ずしもそうでないということですね。日本の感覚で言えば、ヒーロー物語だけれど、一般の人がそうでもない価値観をしっかりと持っているところがすごいと思った。

緒川:そっくり真似しようという発想はなかったですね。

山村:いくつかのマオリのビジネスを見ても、お互いのマーケットを侵食しないようにしていましたね。

緒川:カイコウラでも、そういう話をしていましたね。

相澤:他のビジネスもできるけど、敢えて手を出さないとっていました。

緒川:あれも、自分たちのビジネスを一つ上の視点から見ているよね。自分の取り分はここで、他の人の取り分はあそこだから、そこには手を出さないと。不思議に思ったのは、なぜみんなそういう上の視点を持っているんだろうということです。

小林:それは、コミュニティの入れ子構造があるからでしょうか。

緒川:ホエール・ウォッチ・カイコウラは、53%の株をハブで持ち、47%の株はその上のイウィで持っていましたね。それも、そういう視点が入っているんでしょうか。自分たちの準部族だけで分配するのではなくて、もう一つの上のレベルの部族レベルでも利益を分配するという意識もあるんでしょうか。

山村:コロさんの話からも、そういうところが感じられました。集会で集まる人たちが、補完関係とか相互関係をつくっていく。自分たちの利益のためではなく、地域に雇用を如何にしてつくってあげるかが、自分たちの仕事だとおっしゃっている方が、今回、かなりいらっしゃいましたね。

小林:ホエール・ウォッチング・カイコウラも、最初はみんな無給で手伝っていたというのも、凄いと思いますね。

相澤:部族があったから、部族を守るために家を抵当に入れてまで、できたのかなと思います。それを日本でやるとしたら、どうしたらよいか。部族じゃなくて、地域だ

けだったら、そこまで強く思えたのかどうかはわかりませんね。

緒川：そうかもしれませんね。血というものが持っている、マナというか、精神性というか。

○日本の新しいコミュニティの形成

山村：日本だと、血縁的なものは難しいと思いますが、最近、京都で面白いことがありました。祇園祭の担ぎ手がいなくなって困っていた町が、町内にオフィスを構えている会社に「神事当番」を任せることになった。会社がコミュニティに加わったわけです。祭りを守るというのが、一つのキーになるかもしれませんね。

小林：青森のねぶた祭りも、企業がお金を出したりしていますよね。元々、祭りは、講の組織のようなもので、お金を集めて参加したりしますよね。祭りのようなシンボリックな結びつきというものが、大事かもしれないですね。

緒川：マオリのような血縁コミュニティを、そのまま日本に導入するのは難しいとは思いますが。韓国や中国は血縁を大事にしますが、元々、日本の場合は、血の繋がりよりも、家の方を大事にしていました。家を守るためには、血縁と関係ない養子連れを連れて来たりしていました。だから、日本には元々、血縁でないものにも身を捧げるといふ発想があるんだと思います。それが戦後、会社になったのでしょうが、それをうまく作り変えれば、人の繋がりや仕組みができる可能性はあるのだと思います。血縁が、さほど重要視されないことが逆に幸いするかもしれません。

山村：それはあり得ますね。

小林：職縁の次の概念が作り出せるかな。

山村：職場コミュニティ絶対主義をどう崩していくかが、次のツーリズムを考えるヒントかもしれません。

小林：会社中心というのは、戦後作り上げられた虚像なんですよ。地縁や血縁の次のものを職場に求めて、それも幻想だった言ったときに、次に何が来るかです。

緒川：今は、終身雇用と年功序列が崩壊していますから、次がないと危ない状態にありますね。

小林：拠り所がないですからね。一つは趣味縁でしょうか。

緒川：ネット・コミュニティを育てていくということもあるかもしれません。

山村：ネット・コミュニティは、まだ個人がそこに拠って立てるかと言うと弱過ぎますね。

緒川：そうですね。

山村：家族というところに戻るのかもしれないですね。

小林：もう一度、そういうところを大事にしないと、組み立てられないかもしれないですね。

山村：おそらく、若い人たちが、カップルとか、子供連れで旅行に行き始めているのは、
そういうところを感じ始めているからかも知れないですね。

小林：どう考えても、最小ユニットは、家庭ですからね。あるいは、もっと「個」がし
っかりしていたら、いろんなカップルの形もあるのかもしれないけれど。

2) 事後研究会

日時：2009年9月8日火曜日 14:50～17:10

場所：財団法人日本交通公社 会議室

出席者：北海道大学観光学高等研究センター長
北海道大学観光学高等研究センター
財団法人日本交通公社

石森 秀三 教授
山村 高淑 准教授
小林 英俊 常務理事
黒須 宏志 主任研究員
相澤 美穂子 主任研究員
緒川 弘孝 客員研究員

○国の大きさと自立心、責任感

緒川：まず、今回の調査対象であるニュージーランドという国を見た場合、人口が約427万人で四国程度、GDPは広島県と同程度、政府財政規模は東京都の約8割と、総じて小さな国であることも、前提として考えた方が良いのかなと思います。国力が大きいとは言えませんので、人々が国に依存するにも限度があり、民間が自立的にやろうと意思を持つ傾向にも関係してくるかもしれません。

小林：国の大きさという話は面白いと思う。“小さい”ということにも、意外と意味があるのかもしれない。日本の様々な産業が、世界で伸び悩んでいる一つの理由として、日本の内需が大き過ぎたということもある。1億2千万人以上の人口があるから、その市場だけで今までそこそこ食ってこられた。携帯電話が典型で、日本の企業は国内市場だけで何とかやって来たから、逆に外の市場に対応して来なかった。それが、フィンランドのノキアなどとの大きな違い。観光でも、とりあえず国内客だけで食えるから、インバウンド観光にもあまり対応して来なかった。

緒川：ニュージーランドでは、旅行者数では国内旅行者が当然多いのですが、2000年代になってからは、総宿泊数や総消費額で、海外客が国内客を上回るようになりました。

小林：ブータンも人口70万人ぐらいの小さな国だったし、インバウンドの重要性が日本とはまったく違いますね。3年間の議論で、コミュニティの適正規模という話が何度か出ましたが、「自分たちの文化だ」「自分たちの国だ」という意識を持っている範囲なども考えると、国の規模の話も面白いと思う。

緒川：ブータンでは、官僚やエリートの人たちの優秀さが目立ちました。自分たちが何とかしないと、この国はやっていけない、という意識が強いのだと思います。それは国が小さく、国民1人1人に掛かってくる部分が非常に大きいということがあるのだと思います。日本ほど国が大きいと、大学を出たぐらいの人間1人が、どうこうしよ

うと、それで国が左右されるという意識はないと思います。

○観光振興は、「手段」であって、「目的」ではない

緒川：今回の調査で、まず印象的だったのは、我々が会った人たちが、みな観光振興を手段に何を実現したいのか、という目的意識が明確だったことです。

黒須：貴州では、「観光を本業にしない」「農業が本業である」「観光を本業にした途端におかしくなる」という意識がありました。郎徳上寨などがそうでしたね。

小林：コミュニティ・ベースド・ツーリズムに共通するものとして、そういうことがあるのかもしれないですね。日本の伝建地区では、ほとんど土産物で食っているところがある。ああいうのは、どうなんだろうと思う。時間が経てば、破綻して来るのではないか。地域の生業と観光が通じるという視点が大事だなと思う。

緒川：日本の場合、目的と手段が逆転したり、手段が目的化したりする傾向があります。

黒須：観光振興が最終目的になってしまっているということでしょうか。

小林：ただし、それを言い過ぎて誤解されると困りますね。「観光を専門とする人が誰もいなくて良いのか」と言うのと、そうではない。例えば、全体をプロデュースする役割の人は、専門としていた方が良い。だから、観光振興を目的としてはいけないという言い方と、観光振興より上位の目的が必要という言い方で、若干、ニュアンスが違って来るかもしれないですね。

黒須：観光振興を主目的にしてはいけない、ということでしょうか。

小林：そうですね。あまり極端な言い方をすると、今までやってきたことを全否定されるように捉えられて、混乱するかもしれない。

緒川：観光を手段として、「地域の人々の幸福」を目的とするならば、観光振興は、それを達成するためのサブの目的だ、という言い方はできますね。

石森：日本政府は、「観光立国」を打ち出したけれど、「観光立国」を目指した途端に観光はダメになるという議論なんですよ（笑）。それは、新しい政権に提案しなければいけないと思っている。観光立国は手段であって、「暮らしと命が輝く国づくり」のために観光をやるのだ、というように。

小林：「住んで良し」とは何か、とか、「地域が元気」とは何かとか、そういうところも、もう少し明確にする必要がありますね。「豊か」と書くと、とりあえず皆が納得するから書くというのではダメで、「豊か」とは何かと書かないと。

黒須：「暮らしと命が輝く国づくり」というのは、ホストとビジターの境界線が曖昧になって行く中で、石森先生が、以前、おっしゃっていた、「ビジター自身が輝く観光」に通じるのかもしれないですね。

小林：「命」というのは、時間の流れの中で存在するのであって、瞬間で切っても存在

しないもの。「命が輝く」というのは、生命が“動的平衡なシステム”であることを前提として考えないといけない。

石森：「観光立国」は、あくまで手段であって、それが目的化しているから、おかしいのでしょうね。

小林：だから、数値目標を出して1千万人だとか2千万人だとか言う話になってしまう。

○伝統を守る“マナ”の概念

緒川：今回、観光と文化保全のバランスという視点で大きなヒントとなったのは、マオリの人々が持っている「マナ」という概念でした。観光事業で、マオリ文化が守られているかどうかを聞いたときに、マナがあるか否かが判断基準のようでした。文化伝承は、形式には囚われず、ホスピタリティ精神を表現する価値観“マナアキタンガ”を伝えれば良いとしていました。

小林：「オーセンティシティとは何か」という議論がありますが、それは外の人が決めるものではないと言えますね。マオリの人たちは、自分たちで、マナがあるかどうかで、判断することができる。現地である観光施設について、「本物性を失っているのではないか？」と聞いたときに、「マナがあれば、それが本物なんだ。」「丁寧にやっても、マナがなければ、形だけなんだ。」というようなことを言っていました。最近、歌舞伎役者も、同じようなことを言っているのを聞きました。歌舞伎で伝承されるのは、“性根”だと。役を演じるときに、どういう性根でやるかを伝えるのであって、形を伝えてしまうと、どんどん崩れてしまうと。性根がちゃんと伝わっていけば、それぞれの人が、その性根に沿って、どう表現すれば良いかを考える。それは時代によって変わっていく。しかし、性根は変わってはいけない。形だけ伝えると、伝わって行く中で変わってしまうと。マオリにおけるマナと、日本の歌舞伎の性根は似ているなど思った。

緒川：歌舞伎も、どんどん新しいものを取り入れていますものね。

小林：けれども、芯の部分が変わらない。その変わっていけないものが、性根だと。面白いと思った。

黒須：貴州でも、「文化というのは博物館に入れて保存しておくようなものではない。創造的に変わって行くべきものである。」と書いていましたね。とにかく形式を保存するようオーセンティシティを外部から押し付けるのではなくて、受け継ぐ人たち自らによってしか文化は守られない。守るべきものは、人間の内部にしか求めることはできなくて、表現の形は変えながら受け継がれるということだと思います。

小林：重要な点で、これも“動的平衡”と言えるものかもしれないですね。

相澤：人間というものも、細胞や内部の物質もすべて、どんどん入れ替わっていく。その平衡状態が人間なんですね。しかし、人間は魂を持っているので、「その人だ」と

いうことは変わらないわけです。それと似ていますね。

小林：人間は、“モノ”ではなくて、“状態”のことなんですよね。

黒須：目で見ると静止しているように見えるけれど、実は絶えず動いているということですね。

石森：その“魂”というものが重要ですね。マナも、魂に関わるものですからね。しかし、医学でも、身体的な部分しか見ようとしないうところに問題があります。人間は体と心と魂が一体のものであるべきなんです。WHOでは、1948年に健康の定義として、「身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態」を挙げて、心の部分も入れているんですね。そして、1999年の定義の変更では、「身体的・精神的・霊的・社会的に完全に良好な動的状態」というように、“スピリチュアルな（霊的な）”要素も取り入れた。マオリの人たちは、パケハ（白人）の人たちと変わらない容顔や生活の人たちもいますが、明らかに違うものがありますね。マナは、一つの表現として、電流みたいなものです。触れると痺れるようなものです。強いマナを持っている人を、直接触れることはできないし、強いマナを持っている人は、自分の手で食べ物を食べてはいけません。他の人が、棒に串刺しにしたものを食べさせてもらわないといけない。チャールズ皇太子がニュージーランドに来たときも、マオリは彼に対して舌を思い切り出して威嚇するような動作をしていましたが、あれも皇太子という強大なマナを持った人間から自らを守る行為です。そういうマナというものは、今も、脈々と受け継がれていて、それがマオリたらしめている。

小林：我々が会ったマオリの人は、ある観光施設について、「人は沢山来ているかもしれないけれど、マナをなくしている」という表現をしていました。日本の観光を考えたとき、誰もそんなようなことを言う人はいないですよね。

石森：でも、魂に触れたら、魂が震えるということが起きる。

小林：日本の観光では、そういう概念はなくなったのでしょうか？

緒川：四国のお遍路や昔の伊勢参りでは、もてなす側のホスピタリティ精神として、“マナアキタンガ”に似たようなものは、あったのではないのでしょうか？

小林：もてなすこと自体が、もてなす側の功德を積んでいるということですね。

○日本を日本たらしめているものは何か？

山村：石森先生が「マオリたらしめているもの」ということをおっしゃいましたが、我々も自問自答して、「何が日本人たらしめているのか？」ということをもう一度、考えてみるべきものかもしれませんね。

小林：それがないと、「インバウンド」と言っても、「日本の変わったもの」を見せているだけで、「日本」を見せていないんじゃないかと思えますね。今回、マオリの人を改めて尊敬しましたが、日本に見せるべきそういうものが、あるのでしょうか。

石森：1840年のワイタング条約以降、マオリは、どんどん土地を追われて、戦争で負けて、酒に溺れて、文字もわからないのに契約書にサインさせられて土地を奪われて、抑圧されて行くんですが、「このままパケハの言いなりになっていいのか？」ということで、“マオリタンガ”という概念が生まれ、マオリをマオリたらしめているものは何かと考えるようになりました。マオリ語、儀礼、ことわざ・格言、神話・伝説、ゼスチャー、踊りなどのマオリ文化がそれに該当すると考えられました。しかし、一番、コアにあるのは、マナの観念かもしれませんね。日本のインバウンド観光を考えると、日本たらしめているものは何でしょうね？本当は、みんなそれを求めて来るんだらうと思います。「アメリカやヨーロッパと違う日本は何か？」と。

小林：先日、北海道を代表するフレンチ・シェフの中道博さんのお話をうかがいましたが、フランス料理を作っているけれど、「日本をどう見せるか」という気持ちで作っているとっていました。和魂洋才の“和魂”がないと、単なるフレンチの真似と言われてしまう。それを打ち破るには、どうしたら良いかと。面白いなと思いました。

石森：台湾に、日本のことが好きな哈日族（ハーリーズ）という人たちがいます。彼らが好きなのは、日本のアニメーションや漫画やドラマだったりするのですが、それらを通じて、台湾にはない何かを感じて、求めているんじゃないかと思います。

山村：アニメやドラマは、あくまで、きっかけでしかないかもしれませんね。最初は、アニメが好きになって、そのオープニングの歌が歌いたいから、日本語を勉強するというように。そうすると、段々、小説も読んでみようとか、漫画に出てくる日本食を食べてみようとか、そういう感じでドンドン入ってくるんです。それが実は、鷺宮（漫画及びアニメ『らき☆すた』の舞台として町おこしをしている埼玉県鷺宮町）などで起きている現象とも重なるところがあります。最初は、アニメが好きで入ってくるんですが、段々、商店街の人とやり取りするのが面白くなって、仕事を手伝うようになってか。そういうことが、スピリチュアルな交流になっていくのかもしれないですね。

石森：北大の大学院の留学生の1人に、台湾から来た女性がいて、「何故、北大に来たのか？」と聞くと、今年1月、北海道に旅行に来たときに、北大を訪れたと。そのとき、たまたま入試をやっていて、みんな受験生を温かく応援している様子を見て感動したと。それで、一挙に気に入ったみたいで、北大を受験したと。元々、哈日族でアニメが好きだったらしいのですが、一番のきっかけは、それだったということです。その応援している様子が魂に触れたんでしょうね。最近の我々はなくしている部分かもしれないけれど、お遍路のお接待の伝統なども欧米にはない日本のものかもしれないですね。

相澤：今まで、当たり前のことだと思っていましたけれど、確かにセンター試験のときなど、甘酒を振舞われたりしましたね。

○マナと表裏一体の道德のライン

石森：マオリにとっては、マナを抜きにして、マオリ・ツーリズムは成り立たないというの、重要なポイントですね。しかし、普通の日本人は、マナという概念さえ知らない、難しいことですね。

小林：はた目から見ると、入村儀式で迎える側が4回も行ったり来たりしている方が、丁寧に歓迎しているように思えてしまうけど、マオリの人に聞くと、マナがあれば、1回でも良いという。形式ではないと。外の間人が言うことではなくて、自分たちが決める。そういう話が、とても面白かったですね。非常に勉強になった。観光が文化を変容させてダメにしたという議論もありますが、そういうことではないと思いますね。

黒須：日本の場合は、精神性が所作の細かい点に表れると言ったりしますが、マオリの場合は、どういうところでマナを失ったと感じたんでしょうね？

小林：難しいですね。同じことをやっても違うみたいですね。

黒須：以心伝心でわかるんでしょうか？

小林：質感というか、クオリア（内観によって得られる現象的側面及びそれを構成する個々の質感）なんでしょうね。茶道では、持っているものが違うと、まったく同じようにお茶を立てても、空気や緊張感が違う。相手に伝わるものが全然違う。

石森：“心”と“魂”は、また別というところもありますね。心の方は精神科学や心理学などで解明されつつある部分がありますが、魂の方は解明が難しいかも知れない。言葉も通じない者同士が、心を触れ合わせるということがありますが、その奥には魂というものがあるのかもしれないですね。

山村：現地で「マナがなくなった」と言っていたときに、私には、「誇りを失った」とか「魂を売った」とか、そういうニュアンスにも聞こえました。

小林：私もそれに近いと感じた。

山村：そうすると、スピリチュアルな部分とは別に、道德とか倫理的な要素もあるのかなという気がします。例えば、ホエール・ウォッチング・カイコウラでは、自分たちの会社で地域の観光関連事業を全部やれる力はあるけど、地域全体で富をシェアするために、あえて手を広げないと言っていました。それもマナの一つなのかなという気がします。

緒川：マナを持っていると、自然と道德的基準を満たすのかもしれない。

石森：マナを沢山持っている人ほど、タブ（禁忌）があるんですよね。マナとタブは、表裏一体でセットなんです。だから、形式的な法律はいらないわけですよ。マナが規定するから。してはいけないことが、自ずとわかる。

小林：日本でも「お天道様が見てる」と言っていたように、理屈じゃなくて、みんなが

共通に持っているものがあつたのかもしれないですね。

石森：日本では、今は残念ながら、なくなっているけれど。昔は武士道というものもあつた…。

緒川：“大和魂”というのも、近いものだったのかもしれないね。

○コミュニティの核となる場所の復活を

緒川：もう一つ、マオリの人たちに残っているものは、血縁コミュニティの繋がりでした。

小林：それは重要だと思って現地でも議論したのですが、我々がちょっと行ったぐらいでは、分からないものがあると思います。

石森：それは日本人より、はるかに強い繋がりがありますよ。白人が入ってくる前は、50 ぐらいの部族に分かれて争っていましたから。ただ、時代とともに変わって来ていると思う。グローバル化の中では、意識的にコミュニティの繋がりをする必要があると思う。

小林：マラエがあるということが大きいかもしれない。観念的なだけの絆というのは難しいですからね。コミュニティを具象化する場所があるということが、絆を守っていくポイントかもしれないですね。マラエの中に、先祖を象徴するものが彫られていて、夜、松明で照らされたりすれば、その空間に入ったら、みんな信じると思う。そこにコミュニティの構成員が集うということが、物凄く意味があることだと思う。

緒川：宗教施設であり、集会所であり、憩いの場所であり、コミュニティの中心な場所であるということですね。日本でも、昔は神社がコミュニティの中心の場所でしたね。イスラムの国でも、モスクはお祈りの場所でもあり、くつろぎの場所です。キリスト教国の田舎でも、教会がコミュニティの集会場やコミュニケーションの場でもありました。

小林：そういう場所の復活がポイントかもしれないですね。温泉地では、共同浴場の復活をやっていますが、そういうコミュニティの核となるものが必要ですね。地域コミュニティの核となる場は何かということ、議論した方が良いと思います。

山村：温泉地で外湯がなくなってしまったところというのは、ホテルが内湯で客を囲い込んでしまったところですからね。

小林：昔は、共同湯があつて、裏に温泉神社があつて、地域の核になっている。それらが全部なくなっちゃったんですよ。

○観光資源を観光に提供するために必要なプロセス

石森：今、中小企業庁が、2007 年に制定された中小企業地域資源活用促進法に基づい

て、地域資源活用新事業展開支援事業というのをやっています。それぞれの地域で、地域活性化に繋がる活用可能な地域資源を挙げてもらったところ、1万1千ぐらいの候補が挙がって来ました。農林水産物、鉱工業品、観光資源といった分類の中で、これらの候補の半分近くが観光資源でした。ところが、中小企業庁が120億円の予算で、千件の新規事業を補助することになって、既に600件ぐらいが動いているんですが、そのうち、観光資源を使った新しい事業は全体の7%に過ぎないんです。農産品などは、活用しやすいのでしょうけれど、観光資源はどうも活用しにくいようなんです。それは、コミュニティの問題なのかも知れませんが、どうも一致団結して利用するのが難しい。なかなか、観光資源でうまく行っている地域は少ないですね。

小林：観光資源は、そのままでは観光に提供できずに、それを本当に観光化するには、もう一つ、二つのプロセスや工夫が必要なんじゃないかと思います。それは、「観光創造士」資格の創設というものと関係するのかもしれませんが、その必要な観光化のプロセスを突き詰めると面白いのかもしれないですね。今、観光資源を活用した事業が7%しかないというのは、何かが必要なんですね。そこには、どういう道筋があるのでしょうか。

石森：そういう点でも、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの研究は重要ですね。

小林：観光化した後だけ見て回っても分からないのですが、資源があるだけではダメなんですね。観光化に至るプロセスを、失敗したケースも含めて研究する価値はあると思いますね。

石森：この研究の最後には、コミュニティ・ベースド・ツーリズムを成功させるための条件というものが、提言されないといけないんでしょうね。もう一つ重要な側面は、農商工連携ですね。しかし、一つの地域で農商工連携をするときに、例えばヨーロッパなどでは、観光が根っこにあるのが当然だったりするのですが、日本の場合、観光は除外されて考えられているんです。本来、農商工観光連携でないといけないはずなんです。そのときに、農商工観光連携をうまくやるための条件は何ぞや、という問いが必ず必要になりますね。

小林：美瑛に、JAとフレンチ・シェフの中道博氏が共同で立ち上げたプロジェクトで、地域の農産物を使ったレストランがあるのですが、JAの組合員には、それを認めてない人も多いらしいです。東京で売るルートをもっと広げたいと言う人ばかりで、消費する量がわずかなレストランに何故そんなに力を入れるんだ、という考え方をしてしまう。美瑛で地元の農産物を食べてもらって、東京に帰ってからも買ってくれる。それが重要なんだという話が、なかなかわかってもらえないらしい。いろいろな地域で、どうしようもないお土産ばかりつくっていますが、例えば、野菜を使ってセンスの良いスイーツを作る。そういう“センスを売る”という発想が必要なんですよ。

石森：農業の人は、頭から観光なんて関係ないと言いますからね。観光関係者が地域で信頼を勝ち得ていないということもあります。JAが、商工会とは手が結べても、観

光協会と手を組む気がないという地域が多いですね。

○チャリタブル・トラストと地域の多様なコミュニティ

緒川：今回、地域の組織づくりのヒントとして面白かったのは、「チャリタブル・トラスト」というものでした。チャリタブル・トラストという組織が、観光事業に出資し、観光収入を地域に分配する役割を担ったりしていました。

小林：観光収入を地域に還元する仕組みとして、非常に面白いと思った。地域のインフラのメンテナンスや、保健、教育、住宅など、観光以外のいろいろな面で還元しているようでしたね。

緒川：貴州省で見た老漢族の村（天龍屯堡古鎮）の観光会社も、観光収入を村の下水道整備や学資、保険などに使っていましたが、それと似ています。

小林：そのチャリタブル・トラストも入れ子構造みたいになっている。チャリタブル・トラストと血縁コミュニティが重なるようにあって、他にもNPOがあつたりして、地域の組織が平面的ではなく、いくつもの種類の組織が重なり合っている。このチャリタブル・トラストは、今回、初めて知ったもので、あまり詳しくはわからなかった。もう少し勉強してみたい。



かつての観光ガイドを顕彰するファカレワレワ村

緒川：これからの時代、地域が地縁コミ

ュニティだけで担えなくなって来ているとしたら、血縁、職縁、NPOも含めて、いくつものコミュニティ組織が絡み合っただけで補完し合うというのにも必要かと思います。

山村：それにネットでの繋がりというものもありますね。若い人たちも「ネット・コミュニティ」という言葉を使うようになって来ています。

○観光へのプライド、観光の基盤となるプライド

緒川：今回、印象的だったことの一つに、ファカレワレワ・サーマル・ビレッジの入口に19世紀に活躍した伝説的な観光ガイドの写真入りのパネルが、大きく誇らしく掲げられていたことがあります。マオリ自身に対するプライドだけでなく、観光事業そのものに対しても、プライドを持っているようでした。

石森：今、日本の観光関係者は、すぐに「余裕がない」「金がない」「時間がない」と言いますね。それで、ずるずると来ているところがある。しかし、観光は、金を稼ぐた

めだけにやっているんでしょうか？観光は、その国のプライドを見に来ているとも言える。日本人にとってプライドというのは何なのでしょうね。

緒川：プライドを生み出す場は、コミュニティなのだと思います。良い意味でも悪い意味でも「世間体」という言葉がありました。

山村：教育というものが大事だと思います。今の日本は、家庭でも地域でも、教育を学校に任せてしまっていますよね。昔は、近所のオヤジに怒られたり、まわりが見ていたりということがあったかと思うんです。明文化できないルールというものが消えてしまっている気がしますね。電車の中で騒いでいても、誰も怒らないですし。

黒須：それと絆がセットになっていますね。他の人を、自分に無関係な人と見てしまえば、その無関係な人にわざわざ怒ってあげたりすることはないですからね。

山村：関わらない方が良い、となってしまうですね。

相澤：殺されたりすることもあると、注意したりできなくなってしまいますね。

山村：そういう環境になっているところが異常です。

石森：コミュニティが崩壊していますしね。

緒川：欧米の場合は、コミュニティが機能しなくても、宗教というものがありますが、日本の場合は、無宗教に近いですからね。

山村：ですから、心の拠り所がどこにもなくなっているんですよね。教会は、地域の核でもあり、困ったときに逃げ込め、守ってもらえるところだと思うんです。日本では、どうしようもなくなったときに、自分の居場所がない感覚に囚われますね。誰も助けてくれないから追い込まれるということにもなります。家庭にも、職場にも、地域にも、守ってくれるところがなくなっています。「守る」「守られる」というコミュニティの定義が重要なと思います。チャリタブル・トラストでも、弱者や収入が低い人を助けてあげるといったものだったりします。欧米では、お金を持っている人に、そういう意識があったりします。

石森：統計数理研究所で、1953年以來5年ごとに「日本人の国民性調査」というものを実施しているのですが、昨年の調査結果を見ると、20代や30代で「人のためになることをしたい」という回答が、かつてないほどに上がっているんですね。なかなか捨てたものじゃない。そういう若者の気持ちをうまく導くことができれば、意外な力になっていくと思う。大人たちが、それを活かせるように社会の仕組みを変えていけないといけない。観光という局面で考えたときには、ボランティア・ツーリズムというのも、その一つかもしれませんね。

小林：カイコウラの「旅人の木」で、事務局が2人しかいないのに、どうやって木を植えるんだと聞いたときに、募集すると世界中からボランティアが集まるんだと言っていました。それも一つの方向性でしょうね。

石森：欧米では、慈善文化やノブレス・オブリージュという意識があるけれど、日本では、そこらへんがあまりないから、どううまく仕掛けるかが課題でしょうね。日本に

は、お遍路のお接待の文化というのもあって、ボランティアの精神はあるんです。観光におけるプライドの問題は、もっと正面から扱うべきものでしょうね。

愛知万博でも、始めに目標数値ありきでしたね。本来は、世界にアピールしたいことというのが始めにあって、それを伝えるために何をやるかということになる。それが良いものだったら、結果として人は来る。数値は結果論にしかならないですから。ただ目標数値ありきだったら、「地域で入込客数が減りました。どうしたら良いでしょうか?」「安売りしたらよろしいやん」となりますよね。現にそうなっている。それで数字は持ち直しても、今度は「余裕がない」と言う。「何のために生きてるんだ?」と、いうことになりますよね。田舎で暮らしているのに「余裕がない」とは、もうどうしようもないですよ。 「暮らし」も「命」も、両方、英語で書くと“Life”ですが、観光というのは、そういう生き方に関わってくるものだと思います。誇りというものも、そこに関係しているのではないかと思いますね。

小林：行き着くところ、そこだと思いますね。

石森：いろいろな地域で、「名もないけれど、こんな素晴らしい人がいるんだ」という人が、まだ、いるんじゃないかと思います。誇りを意識しなくても、誇りがあるような。素晴らしい生き方だなと思わせるような。

○「ビジット・ジャパン」から、「エンジョイ・ジャンパン」へ

緒川：マオリの人たちは、西洋人からの抑圧の歴史を持っているわけですが、クライストチャーチのタマキ・ヘリテージ・ビレッジでは、被害者としての歴史を前面には押し出すようなことはせず、観客が野外劇の中に取り込まれるような形で歴史を疑似体験し、観客自らが考えるのに任せているようなところがありました。情報・知識とエンターテインメント性を融合した一つのエデュテームントが、逆に伝えたいことを効果的に伝えているように感じました。

石森：観光はまがいものだとか言われたり、オーセンティシティ論でも、細工することが良くないと言われたりするけれど、さりとて、基本的に楽しくないとね。いきなり、旅先で誰かの人生と真正面から向き合っても…（笑）。結果として、その出会った人の人生に触れ、自分の人生について考えるようになるなら良いのだけれど、「このツアーに参加したら、人生考え直すようになれます」なんて言われても困りますよね。エンジョイしながら、人生を考えたことができたなら、もう一度来てみようと思ったり、誰かに「凄いや〜。何か考えさせられ



カイコウラ・旅人の木

たよ。」と伝えたりできるけれど。「ビジット・ジャパン」と言っても、ビジットは当たり前で、来てくれただけで良いのか。「エンジョイ・ジャパン」とならないといけないですよ。

小林：「とにかく来いよ」じゃ、次の展開がないですからね。「金を落としてくれ」って、言っているようなものです。外貨を落としてくれたら良いという途上国の観光政策と同じです。

石森：それではとんでもないですね。しかし、こうやって、いろいろ大きな課題もいくつか浮かび上がって来るような重要な切り口もあって、今回の調査は、観光の核心とも言える部分に迫るものだったのではないのでしょうか。

(4) ニュージーランド調査に関する考察・検討・議論のまとめ

- ・ マオリの観光の成功要因は、観光政策をはじめとする観光分野の中だけに求めることは難しく、マオリの社会構造やマオリの観光リーダーたちの哲学や考え方に起因する部分も大きいと感じられた。本調査では、観光分野の現象だけに囚われず、少し視野を広く持ちながら、マオリの観光の成功要因を分析した。
- ・ また、成功したマオリの観光の事例を見ていくと、日本の状況と対照的と感じられることが多かった。今回の調査では、マオリの観光を学ぶことで浮かび上がってきた日本の観光の課題についても検討した。

1) マオリの観光の成功要因

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①“観光は手段”という位置づけ②観光と文化保全のバランス感覚③コミュニティの入れ子構造④“民”の自立⑤観光のグローバル競争への適応 |
|---|

①“観光は手段”という位置づけ

- ・ 今回の調査で、最も印象的なことの一つは、ほとんどのインタビュー対象者が、異口同音に「ツーリズムは、ビークル（乗り物）だ」と語り、観光を何故やるのかという目的を、しっかりと持って、常に意識していたことである。
- ・ マオリ・ツーリズムで大成功したと言われ、国内外で事業展開するマイク・タマキ氏は、マオリ文化を伝えたいという目的がまずあって、観光はそのためのビークルだと語った。また、ワイボウアの森でエコツアーを行っているコロ・カーマン氏は、観光は地域の幸福を実現するためのビークルだと語っていた。
- ・ いずれも、観光振興より上位の目的があって、その目的を達成する手段としての観光は、どうあるべきかという考え方や哲学がしっかりしている。これは、前年調査のブータンで学んだ、経済発展も環境保全も文化保全もすべて、国民の幸福のためであるというGNH（国民総幸福）の考え方にも似ている。
- ・ 日本の場合、戦後、経済発展自体が目的化し、何のために経済的な豊かさを求めているのかが見失われてしまった。また、観光振興も、地域振興の手段として位置づけられることはあるが、その地域振興が何を意味するかがあまり明確に意識されず、ただ漠然と地域の経済発展が志向されるのみで、観光振興や地域振興自体が自己目的化され、観光客数や域内消費額の増加のみが目的とされることも多い。
- ・ しかし、観光客が増えたり、域内消費が増えたりしても、地域の秩序が乱れたり、環境を損ねたり、地域に根ざした伝統的な文化や生活が失われたりして、地域住民

の幸せから遠ざかるのであれば、何のために観光振興をし、地域振興をしているのか、わからなくなる。

- ・ マオリやブータン人は、目の前のことに囚われることがないように、文化の伝承や地域住民の幸福といった観光振興の目的を明確に意識して、見失わないようにしているために、その本来の目的から外れるような方向へと観光事業が向うことに釘を刺すことができるし、地域住民不在の本末転倒にもならない。それは、観光への取り組み自体のモチベーションを高めることにもなる。
- ・ その上、観光の奥にある地域住民に根ざした文化や生活を敏感に感じるようになった現代の観光客は、自己目的化した観光事業には魅力を感じなくなり、むしろ逆説的ながら、観光だけが目的でないものを観光することに、強い魅力を感じるようになって来ているのである。
- ・ わが国においても、まず観光振興や地域振興は手段であり、その上位の目的は何かを明確にし、さらにそうした目的を地域で共有することが、地域の観光を成功に導く近道であると考えられる。その目的とは、必ずしも地域に金が落ちることだけではないはずである。地域の人々がウェル・ビーイング、すなわち、身体的、精神的、社会的に健康で安心でき、満足できる生活状態となることをベースに、地域に誇りを持って生きることができるよう、地域それぞれの固有の条件や課題に合わせて、検討されるべきものである。

②観光と文化保全のバランス感覚と生きた境界線

- ・ マオリの人々は、それぞれ観光振興と文化保全のバランス感覚を持っていたが、これについては、特に共通した明確な基準を持っているようには見受けられなかった。その代わりに頻繁に聞かれた言葉が、「マナ (Mana)」という言葉である。このマナ概念は、翻訳が難しいものであるが、人間や聖なるものに宿ると信じられる超自然的な力である。威信、権威、格、精神、影響力なども意味するが、「魂」「霊」「気」などにも近い概念のようにも思われる。
- ・ マオリたちに、観光事業でマオリ文化が守られているかと聞くと、「あそこは、マナを失った」「私たちは、マナを大切にする」というような言い方をし、「マナ」があるか否かが、自分たち本来の文化であるか否かの重要な判断基準であることがうかがわれた。いくら経済的に成功しても、マナが失われたと判断されたら、尊敬されないようだった。また、自分たちの文化を観光提供するにあたって、どこまでアレンジして良いかの基準も、外形的、形式的なものではなく、このマナがあるか否かに拠っているようだった。
- ・ ただし、基準と言っても、部族や個人ごとに感じる基準のようであり、どこに境界線があるかは、必ずしも明確ではない。西洋的な基準の概念からすると、曖昧で頼りないものかもしれない。しかし、この主観的な基準は、タブ (タブー、禁忌) の

概念と表裏一体性の強いものであり、マナの有無の差は大きい。その一方でまた、生きた人間がTPOに合わせて臨機応変に現実に対応していくのに適した、柔軟性を持ち合わせているものであるとも感じた。

- ・ 我々は、今回の調査中、マオリの口から、オーセンティシティ (Authenticity) という言葉を一度も聞かなかったが、それは、このマナがあるか否かの価値観と、オーセンティシティという概念が馴染まないからではないだろうか。
- ・ ロトルアで18世紀から行われているマオリ・ツーリズムでは、西洋の楽器や音階、新しく創作された歌や踊りが取り入れられたショーが、様々な場所やホテル内などで毎日のように行われている。それらも、必ずしも、マオリの伝統に背くものと考えないという意見も聞かれた。
- ・ マオリ・ツーリズム関係者の全国組織であるマオリ・ツーリズム・カウンスルは、マオリ・ツーリズムの中核となる価値観の一つとして「マナアキタンガ (Manaakitanga)」を掲げている。それは、お客様には最高のホスピタリティを提供する義務があるという、先祖代々伝わる精神である。その価値観の継承を、形式の伝承よりも遥かに優先させている印象であった。いくら伝統的な形式を守っていても、マオリの中核となる価値観や精神を失ったものであれば、意味がないのである。
- ・ 形式的な基準は、一度決まって明文化がなされれば、より多くの人間がその基準を参照して守りやすいという利点がある。しかし時代や状況の変化に応じて臨機応変に対応することは難しい。また形式主義に囚われ、エッセンスが失われ、死んだ文化になったり、地域で生活する住民の現実を疎外したものになったりしかねない。また、往々にして、こうした形式的な“オーセンティシティ”を守るための基準は、西洋を中心とした外来的な基準をベースにしたものになりがちであり、外在的・他律的な性格がある。
- ・ それに対して、マオリのマナによる基準は、そこに住む人々が自ら決める内在的・自立的なものであり、地域の生活に根付いた生き活きとした文化を維持し、観光魅力の維持・創造に繋がっているものと感じられた。

③コミュニティの入れ子構造

- ・ マオリ・ツーリズムのリーダーたちに共通して見られた発想は、何事も“シェアする”という発想である。観光客と自分たちで、「楽しみをシェアする」「知識をシェアする」という表現がよく聞かれたし、観光事業によって得られた利益を、「地域でシェアする」という言葉も、ほぼ共通して聞かれた。そのシェアをする仲間は、自分たちの親戚や部族に限られない。

- ・ 特にホエール・ウォッチングで成功したホエール・ウォッチ・カイコウラ社では、経済的な利益を地域でシェアすることを会社の方針とし、ホエール・ウォッチング以外にも、飲食店や宿泊施設などを多角経営できる力を持ちながらも、あえて行っていない。地域の他の企業が行っている事業に参入することは絶対ないとも言っている。ホエール・ウォッチングのために訪れる観光客がもたらす富を、地域住民全体で共有できるようにし、また地域の雇用を増やすためである。



飲食店やショップが並ぶカイコウラの町並み

- ・ 実際に、小さなカイコウラの町には、同社の成功以来、多くの飲食店や宿泊施設が立地するようになり、ドルフィン・スイミングやアザラシなど野生生物のウォッチング、エコツアーやウォーキング・ツアーなど、様々な観光産業のスマール・ビジネスが増え、カイコウラの観光魅力は、多様化して来ている。
- ・ この自分たちだけの利益に囚われず、富を地域に広く還元して共有しようという公の精神とそこから来る発想は、マオリ社会の血縁社会に起因するものではないかと我々は考えた。マオリの個人や家族は、拡大家族と訳される「ファナウ」に属する。複数のファナウから、準部族である「ハプ」が構成される。さらにいくつかのハプから、部族である「イウィ」が構成される。このような血縁コミュニティの入れ子構造である。
- ・ マオリは、血縁を重要視する血縁コミュニティが根強いが、その血縁コミュニティに明確な入れ子構造があるが故に、個人やグループ単位でのエゴが許容されにくくなっているのではないかと考えられる。すなわち、自分1人や自分の身近な家族だけのことを考えられるのは、ファナウの間で許されないことである。また自分のファナウの利益だけを考えるのは、その一つ上位のハプの社会では許されないことである。また、自分のハプのことだけを考えるのは、さらに上位のイウィの中で許されない、というように、公の概念も、小さいものから大きいものまで入れ子構造になっているのである。
- ・ また、何か自分たちの間にトラブルや問題が発生した場合や、特定のグループが暴走を始めた場合にも、上位の血縁コミュニティがあると、より上の広い公の視点から調整することができる。そういったコミュニティの入れ子構造が、より上位の公の視点でもものを見る発想を養うのではないだろうか。
- ・ ホエール・ウォッチ・カイコウラでは、会社の53%の株をハプで持ち、47%の株はその上のイウィで持っている。自分たちの準部族だけで分配するのではなくて、

もう一つの上のレベルの部族レベルでも利益を分配するという意識があるのである。しかも、富をシェアする範囲をマオリの血族の中に限定せず、白人やアジア人なども含めた地域住民全体と考えていた。

- ・ マイク・タマキ氏は、マオリ・ツーリズムの成功で得られたビジネスモデルを、全世界の先住民族の間で共有したいという発想を持っていたが、そのような発想も、マオリ社会の入れ子構造の“公”を敷衍した考え方なのかもしれない。
- ・ 1991年にコミュニタリアン綱領を発表したアメリカの社会学者エツィオーニは、「地域共同体が独善的で偏向した集団とならないために、その共同体を越えた包括的共同体の存在を意識し、場合によっては自己の地域共同体における過度の特殊性を修正する必要」があり、また、共同体を超える「超共同体」の意識を持つ必要があると主張している（参照：宮平望「アメリカの「コミュニタリアン綱領(1991)」の解説」『西南学院大学国際文化論集 第13巻 第1号』西南学院大学、1998.9）。マオリの入れ子構造型の血縁コミュニティは、既にこのエツィオーニが語るコミュニティのあり方と、超共同体意識をも実現させているのかもしれない。

④“民”の自立

- ・ 日本の成功した観光地と共通することであるが、マオリの成功した観光リーダーたちには、国や地方の政府に頼ったり、補助金がなければ何もできなかつたり、という姿勢は無い。主体となるのは政府ではなく、自分たちであるという意識が強く、政府にはパートナー以上の大きな役割を期待していなかった。
- ・ ニュージーランドは、最大の輸出相手国だったイギリスが1973年にEC（ヨーロッパ共同体）に加盟して、ニュージーランドとの貿易量が激減したことと、第一次オイルショックをきっかけに経済危機に突入した。経済政策の失敗も重なって、政府財政も危機に陥り、高福祉・高負担の社会主義的政策を捨てて、補助金の全廃、国有財産の売却、国営企業の民営化、規制緩和、自由競争の推進といった行財政改革に踏み切った。
- ・ その混乱により、一時は失業率が10%を超えるなど大きな傷を残したとも言われるが、このことがニュージーランドの経済体質と産業構造を強化するきっかけとなった。ホエール・ウォッチ・カイコウラも、国鉄など国の事業の民営化により、地域で多くのマオリが職を失ったことをきっかけに、雇用創出を図ってマオリが都会へと出て行くことを防ご



1日1往復2路線の観光列車のみとなった南島の鉄道

うとしたことが起業の理由である。

- ・ 不況や失業自体は、好ましくないものであり、ニュージーランドの行財政改革も評価が分かれるものであるが、カイコウラでは、官に頼らない民主導の起業の大きなきっかけになったことは確かである。この時期は、ニュージーランド人に、政府は当てにならない、何事も自分自身でやらなければならない、という意識を形成させた可能性がある。
- ・ また、今回、視察したカイコウラ、ロトルア、ホキアング（ワイポウアの森のある地域）のいずれの地域でも、観光事業に資金を提供し、また最高意思決定を行うチャリタブル・トラスト（主に公益的な活動やそのための支援を行う非営利組織）という組織の存在が大きいことを確認したが、そのチャリタブル・トラストも、公益的な視点から事業を行うものの、政府ではなく、民間の組織である。
- ・ こうした“民”の側の自立、さらには民が公益性を担う意志や動きが、観光事業の主体性や自立性を担い、また市場のニーズや変化にも対応できる魅力ある観光の創出に繋がっている可能性がある。

⑤観光のグローバル競争への適応

- ・ マオリ・ツーリズムの中心的存在であるロトルアの町で驚いたことの一つは、いくら国際観光の町とは言え、どの観光事業者も海外観光客の動向を強く意識していることである。タマキ・マオリ・ビレッジやミタイ・ビレッジでは、集まった観衆を盛り上げることを兼ねながら、どの国から来たかを挙手させながら確認していた。街中の土産物屋で買い物した際には、ほとんど必ず出身国を聞かれた。これらはマーケティングに活用する理由もあるものと推測された。
- ・ これは、ニュージーランドが、人口わずか427万人（2008年）の国であり、国内市場が小さく、必然的に海外市場を相手にせざるをえないためであるとも考えられる。競争相手は、海外の他のデスティネーションであり、しかも、観光客の大量供給源であるアメリカ、ヨーロッパ、日本などに対して、ニュージーランドは地球の反対側とも言えるほど地理的に非常に不利な条件にある。
- ・ このため、世界を相手に常に非常に厳しい競争に晒されるわけであり、国際的なスタンダードに耐えうる観光魅力を創造し、品質を維持・管理しなければならない。そういう環境の中で、各観光事業者が大いに鍛えられているものと思われる。
- ・ 国内市場がないに等しいブータンでも、国際的な品質基準を意識していたが、ロトルアのマオリ・ツーリズムの地域組織であるマオリ・イン・ツーリズム・ロトルア代表のルネ・ネイサン氏は、マオリ・ツーリズムの地域組織の目的として、観光事業者の提供する商品の品質を「エクスポート・レディ（Export Ready：輸出準備完了）」にすることを挙げていた。
- ・ 日本では、観光業を含め、ほとんどの産業が、国内市場が大きいおかげで、海外市

場を二次的なものと考えていた部分がある。しかし、人口減少や経済低成長の時代を迎え、マオリのグローバル対応に学ぶ面は大きい。

2) マオリの観光から学ぶ日本の観光の課題

- ①観光を手段として成し遂げる目的の明確化
- ②情熱とロジックのバランス感覚の醸成
- ③コミュニティの重要性の認識と再生
- ④自分たちの地域や文化に対するプライドの醸成
- ⑤情報・知識とエンターテインメント性の融合（エデュテートメント化）

①観光を手段として成し遂げる目的の明確化

- ・ マオリ・ツーリズムの成功要因として挙げた「観光は手段」という位置づけは、観光戦略や観光計画を立てる場合、不可欠の前提であるにも関わらず、日本では、あまり意識されて来なかった部分である。観光は、あくまで国や地域の幸福を実現するための手段であるという意識がないと、観光戦略や観光計画を何故、行うかが不明確で、場当たりの、どこへ向うかの方向性も曖昧であり、観光魅力や地域ブランドの形成に繋がって行かない。
- ・ 「なぜ、地域で観光に取り組むのか？」マオリの観光リーダーたちは、地域住民の幸福、マオリ文化を若い世代に伝承し、世界に伝えていくことなどを挙げていた。観光の目的は、ただ個人や観光事業者の経済的利益だけではなく、より広いコミュニティや地域、さらには国全体や世界まで視野を広げて、考えるべきものである。また、現在だけでなく、将来に至るまで持続的な社会を築くことを前提に考えるべきものであろう。すなわち、観光の目的を考えることは、同時に観光の世界戦略や長期的戦略を考える前提であり、出発点ともなる。
- ・ また、観光分野での細かい戦術や手法だけを地域全体で共有することは非常に難しいが、観光をなぜやるかという目的と、それに基づく大まかな長期的で広い視野を共有すれば、自ずから、関係者や地域住民1人1人が、自分のやるべきことを理解できる。そして、考え、魅力ある地域づくりへ向けて、大まかにではあるが、正しい方向に行動していくことが可能になる。
- ・ 多くの先住民族では言語をはじめ文化の存続が危機に瀕しているという。特に言語は、一度、失われるとそれを復活させることは不可能に近いが、2千年間話されていなかったヘブライ語は、情熱ある1人の研究者から日常語としての復活が始まり、そのおよそ百年後の今ではイスラエルの公用語として誰もが使う言葉となっている例もある。このように、短期的には不可能なことでも、情熱と長期戦の覚悟があれば実現できることもある。

②情熱とロジックのバランス感覚の醸成

- ・ マイク・タマキ氏は、通常のビジネスであれば、「80%のロジックと 20%の感情」で対応する必要があるが、マオリの観光事業では「80%の感情と 20%のロジック」で対応しないといけないときもあると語った。いずれにしても、情熱だけでも、計算だけでも、うまくいかず、その両者のバランスを取ることが成功のために必要とされていた。
- ・ マオリ・ツーリズム・カウンスルでは、マオリが、物質、自然、精神、そして文化資源などを守る伝統的な保護者たるべしという「カイティアキタンガ (Kaitiakitanga)」をはじめとした「カウパパ (Kaupapa)」と呼ばれるマオリの価値観を、組織の理念として掲げ、その実現を重視しているが、その一方で、マオリがビジネスのセンスやスキルを身につけるための支援にも力を入れていた。また、情熱的に地域での観光振興に取り組むコロ・カーマン氏も、自らがビジネスを始める前には、1年間、観光客の調査やデータ収集をし、冷静な分析を行っている。
- ・ いずれの場合も、情熱が大事と言いながらも、情熱だけではなく、冷静なビジネスのロジックも踏まえており、我々が会ったマオリたちには、環境原理主義者や文化保護原理主義者はおらず、あるいは経済優先主義者もいなかった。いずれの観光リーダーたちも、熱い理念と冷静なロジックの両面を持ち合わせて、バランスを取る努力をしていることがうかがえた。
- ・ ビジネスのロジックを保持することは、経営者として当然必要な能力なのかもしれないが、一方で、マイク・タマキ氏は、マオリ文化や道徳を伝える講演や教育活動を盛んに行い、コロ・カーマン氏は、わずかな報酬で地域の起業支援などに多くの労力と時間を割くなど、社会貢献にも熱心である。
- ・ 日本の場合は、それとは対照的に、経済的な成功は、地域経済を潤し雇用を創出しているとして、それだけで社会貢献しているかのように捉えられる場合も多い。それは、下手をすれば、地域住民の生活を守ることを口実にした経済優先主義になりかねず、環境保護も文化保全も、経済に余裕があるときに取り組めば良いといったような、経済に従属した優先度が低い存在にもなりかねない。
- ・ しかし、本来は、その両者のバランスが取れてはじめて、地域の幸福があるのではないだろうか。すなわち、ロジックの中身に置いても、経済と道徳のバランスが必要なのである。二宮尊徳の報徳思想では、「道徳のない経済は犯罪である。経済のない道



ゴミ分別とリサイクルを徹底するカイコウラ

徳は寝言である。」と言っている。この「道徳」という言葉を、「自然保護」や「文化保全」と置き換えても良い。日本でも、このように経済と道徳の両立を重視する思想は存在する。

- ・ 自然保護や文化保全といった道徳を無視し、経済を優先した観光には、観光客も魅力を感じなくなって来ている今日、観光事業でも、経済と道徳の両立を重視する考え方やバランス感覚を再興していくことが求められている。

③コミュニティの重要性の認識と再生

- ・ 人間が居住せず、生業も営まれない原生自然環境の地域を除けば、自然環境や景観、文化や佇まいなどの観光魅力を保全し、管理し、磨いて行くのは、地域で生活するコミュニティであり、その働きを他の手段で代替することは難しい。すなわち、観光は、コミュニティ・ベースでないと成立しないのである。まずは、その認識を共有することが求められる。
- ・ また、マオリの観光の成功要因「③コミュニティの入れ子構造」のところで述べたように、個人や観光事業者が地域や社会に貢献する意識の背景に、コミュニティの入れ子構造があることを見たが、その前提にまず、コミュニティ組織が生きているということが重要である。
- ・ 日本の場合、明治から現在に至るまで、度重なる市町村合併や価値観の近代化があり、地方においては過疎化・高齢化が進行して、コミュニティの多くは機能不全をきたし始めている。また、戦後、地縁コミュニティの代替物的役割を果たしてきた企業など職場の職縁コミュニティも、近年の終身雇用制や年功序列制度の崩壊により、大きく弱体化しており、地縁、職縁に留まらず、何らかのコミュニティ組織の再構築、再活性化が課題になっている。
- ・ その一方で、今も残る旧来型の地域コミュニティでは、人間関係の煩雑さや窮屈さが、現代の価値観と合わない。特に女性は、発言権が弱く拘束されるしきたりも多いのに、共同作業などの労力は男性以上に多いなど、女性にとって住みにくい地域社会も多い。それも過疎化や困難な結婚相手探しなどの問題に繋がっており、強固な地域コミュニティには、良い面だけでなく、改善すべき欠点も多い。
- ・ 今回の調査では、世界で初めて女性参政権が認められたニュージーランドの政治的土壌もあってか、マオリの女性たちが生き生きと表舞台で活躍している様子が見えた。
- ・ 一つのヒントと思われるのは、訪れたいずれの地域でも、観光事業に出資し、利益を地域に分配する役割を担っていたチャリタブル・トラストという組織があったことである。マオリのファナウ、ハプ、イウィといった血縁コミュニティ組織とは別に、地域のチャリタブル・トラストなどの組織や、各種の住民組織、マオリ・リージョナル・ツーリズム・オーガニゼーション(MRTO)などの職縁組織、さらに

は自治体といった様々な地域組織があり、それらがときには連携・協力し、ときには組織間で協議して、異なる利害関係を調整しているように見受けられた。

- ・ このような多様な地域組織があることが、閉塞的になりがちな地縁コミュニティや血縁コミュニティの風通しを良くし、縦糸と横糸のような関係で、互いの欠点を補ったり、チェックしたりする機能を果たしているとも考えられる。
- ・ 日本でも、京都の祇園祭などでは、地縁コミュニティだけで担いきれなくなり、地域の企業などの職場単位で参加する動きが出始めているが、そうした地縁以外のコミュニティとの補完関係の構築や、コミュニティの最小単位である「家族」や学校、趣味縁、さらにはネット・コミュニティなどの複合的な組み合わせや協力などに、コミュニティ復活の可能性があると考えられる。



ファカレワレワ村の入口で顕彰される 19 世紀のガイド

④自分たちの地域や文化に対するプライドの醸成

- ・ 我々が出会ったマオリの観光関係者は、マオリ民族であることや、自分たちの地域や文化へのプライドを強く持っていた。そのため、観光客を楽しませるために、歌や踊りのアレンジはするものの、決して客に媚びることはない。そのため、ときには、ルールを破って儀式の最中に笑顔を見せた観光客を殴ってしまうという、行き過ぎた事件もあったようだ。しかし自分たちやマオリ文化へのプライドが、アトラクションの質を高めるモチベーションにもなっているし、客に迎合した見世物に飽きた観光客には、奥深い本物性を感じさせるものになっている。
- ・ 自分が自分であることに否定的な感情を持っていたり、誇りを持ってなかったりすると、自分たちの文化を観光に提供する際に、どうしても演技じみた装いの見世物になるし、伝統文化の持つ精神が失われることを避けることはできないであろう。
- ・ また、マオリの観光関係者たちに共通していたのは、観光という産業自体へのプライドである。特に印象的だったのは、ファカレワレワ・サーマル・ビレッジ（地熱を利用しながらマオリが生活しているロトルア地域の集落）の入口に、19 世紀からの観光の歴史やかつて活躍した 19 世紀の伝説的な観光ガイドが、写真入りの大きなパネルで誇らしく展示されていたことである。
- ・ 日本では、最近まで観光産業が不要不急の産業として軽んじられる傾向が強かった。しかし、マオリ・ツーリズムの成功要因の「①“観光は手段”という位置づけ」で述

べたように、マオリにとって観光は、地域住民の幸福や伝統文化の継承などの崇高な目的を実現する手段であり、さらに世界中の人々と交流して、自分たちを知ってもらえる素晴らしい手段であるとも認識していた。また、観光が、マオリのプライドを育て、そのプライドが観光の質を高めてきたという好循環もある。

- ・ 日本の過疎地域などでも、まずは自らやその文化にプライドを持つとともに、観光の目的を明確に持ち、観光事業にもプライドを持つことが必要である。それとともに、外部の人々に地域が認められることによって、地域の人々のプライドが育っていくという、観光が持つプライド醸成のプロセスとその効果に対しても、広く認識を共有すべきだと思われる。

⑤情報・知識とエンターテインメント性の融合（エデュテートメント化）

- ・ 我々が見て来たマオリ・ツーリズムは、自分たちの文化や歴史を伝えたいという思いが強く感じられたが、しかし、決して、その思いを客に押し付けたり、沢山の情報を詰め込んだりするようなことはなく、観光客にまず楽しんでもらうことを必要条件と考えているようだった。
- ・ マオリと白人の間の歴史を描いたタマキ・ヘリテージ・ビレッジ（2007年にクライストチャーチに開設されたマオリの歴史物語を野外劇等で演じる観光施設）でも、観光客の大多数を占める白人に対して、被害者としてのマオリの歴史を強調することはなかった。観客は、白人とマオリが出会った歴史の中に入り込むような形である。そこでは、白人やマオリがそれぞれ、どのような立場を持ち、どのように感じたかが示され、またマオリの内部であった対立などを描くなどして、白人を一方向的に糾弾するようなことは避けられていた。そして、観客自身がそれぞれ自分で感じ、考えるに任せているように見受けられた。
- ・ また、野外博物館を舞台に、野外劇や歌や踊りなどのエンターテインメント的要素を散りばめ、情報・知識とエンターテインメント性を融合した一つのエデュテートメントであるように感じられた。
- ・ これは、一つの見せ方の戦略であると考えられ、「自分たちは、被害者だ！」ということを出せば、多少の興味を持った観光客も引いてしまうし、そもそも訪れる客自体得られず、結果として、自分たちの思いは伝えられない。逆に、歴史調の舞台で観客自身に疑似体験して考えてもらう仕掛けの方が、抵抗感なく観客の心に入って行ける。
- ・ また、カイコウラのマオリツアー社のエコツアーでは、ひたすら自然の中を巡って、自然や文化に関する知識を解説するのではなく、ガイドであるモーリス・マナワトゥ氏の自宅に参加者を招き入れる時間がある。参加者がお茶と軽食でリラックスメして歓談し、交流して楽しむ時間を重視する。その中で、マオリ族の文化では、一緒に食べるということを重視するのだということ、さりげなく体験させ、伝えてい

た。

- ・ フットプリント・ワイポウア社のワイポウアの森のナイト・ツアーでは、森に関する自然やマオリの民話・伝説などに関する解説はあるものの、より強い印象を受けたのは、森の暗闇の中で捧げられるマオリ語の祈りを聞き、その後、ただ静けさを感じるという体験である。何も語らずして、森への畏敬の念を参加者に伝えることに成功している。
- ・ いずれの場合でも、文字にできる情報量は少なくても、知識を情報として伝えるより遥かに多くのことを伝えることができている。また、そのエンターテイメント性や感動を与えるやり方は、人気を呼び、来訪する客を増やすことにつながっている。
- ・ まず「面白い」と思ってもらうことや感動体験は、より記憶力を高めるもので、直接的な情報伝達や主張よりも効果的である。結果として、マオリの歴史や文化を伝えたいという思いを、最大限、達成できる方法となっている。
- ・ 確かに観光には教育的側面もあり、特にエコツーリズムには、科学教育の一翼としての期待もある。しかし、参加者が楽しむこと、感じることで、より深く伝え、長く記憶されるものも多く、結果として高い教育効果も得られることを考えると、知識・情報とエンターテイメント性がバランス良く融合したエデュテートメント化も、観光の重要な課題となる。